

たくさんのご応募  
ありがとうございます!

秋田文壇を見つめて半世紀。  
100号を目指して折り返し、  
第51集で新たな一歩を踏み  
出しました。

応募総数	267 作品
入賞	46 作品
小説・評論	2 編
詩	6 編
短歌	63 首
俳句	119 句
川柳	56 句
エッセイ	4 編
グリーン賞 4 作品掲載	
詩・俳句	

をる  
文化す  
旅 ▶▶  
ブン旅  
▶▶の  
おわ  
ない!



あきた県民文化芸術祭 2018  
あきたの文芸第 51 集  
入賞作品集  
平成 30 年 11 月  
発行・秋田県 (非売品)

photo:photo studio y.nagasaki「睡蓮」  
design: office ttt 2016 © araya.jp

# あきたの 文芸第 51 集

あきた県民文化芸術祭 2018 あきたの文芸第 51 集 入賞作品集

あきた県民文化芸術祭 2018 あきたの文芸第 51 集 入賞作品集

駅を出て西へ向かう舗道から、水面に浮かぶ  
赤い花が見えた。  
ヒツジ草という名前と花言葉を教えてくれた  
のは彼女だ。  
ジヴェルニーの庭の睡蓮と画家について話し  
てくれたのは祖父だ。  
今日の花の美しさを、僕は誰かに伝えられる  
のだろうか。

「あきたの文芸」

第五十一集



# あきたの文芸 第51集 目次

● 小説・評論

入選

古川善六  
藤原涼

● 詩

奨励賞  
奨励賞  
奨励賞  
入選  
グリーン賞

馬と満月……………小林康子  
お引き取り願います……………谷 恵美子  
ティールーム「陶」……………いしぎとゆうき  
鈴木 仁……………工藤美咲  
大森 開登……………堀内和佐  
葉月 祐……………藤田茉希

● 短歌

最優秀賞  
奨励賞  
奨励賞  
奨励賞  
入選

竿 燈……………田中 安  
青 田……………佐藤 栄悦  
春の面影……………石田 幸栄  
さよなら、教室……………蓬田 真弓  
小田 敏……………大 山 文穂  
渡部 栄子……………小川 勇

●俳句

最優秀賞  
奨励賞  
奨励賞  
奨励賞  
入選

秋 日和  
あゝ日本海  
祈りの園  
西馬音内盆踊り  
佐々木 成  
秋野 護  
小國 弘二  
渡部 京子  
田村 陽子  
鎌田 奈菜子

石井美智子  
川尻弘子  
舟山つぐみ  
山田草人  
山崎勝重  
加瀬谷敏子  
寺田秋悦  
阿部清流子

宇月よしを  
斗三木堂  
土用三郎

●川柳

最優秀賞  
奨励賞  
奨励賞  
奨励賞  
入選

ミアキヤット  
鬼ごっこ  
運動会の想い出  
斜交いの風  
三浦千両  
加藤 円心

小畑寒丈  
菅原浩洋  
佐藤光豊  
伊藤光愁  
佐藤ちずる

石田幸栄

●エッセイ

最優秀賞  
奨励賞  
奨励賞  
入選

すり鉢を悼む歌  
クニマスサマ  
私にできること  
藤村美子

坂本愛子  
鈴木護  
後藤千鶴子

●最優秀賞受賞のことば

.....

●選

評

.....

小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ
-------	---	----	----	----	------

安藤 巳智子	寺田 和子	佐々木 勉	熊谷 尚	藤 咲子	佐々木 義幸
六郷 博志	前田 勉	加藤 隆枝	岩谷 塵外	小松 隆義	羽田 朝子
鈴木 祐丞	大八木 敦彦	菅原 恵子	和田 仁	長谷川 酔月	野口 千恵子

●あきた県民文化芸術祭2018「あきたの文芸」応募状況

●あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名

小說・評論

# 小説・評論

## 入選 路の臺

大館市 古川 善 六

一

八代將軍徳川吉宗の時代（一七一六）頃より、幕府の財政は極めて困難なものになってきていた。元禄から宝永にかけて、貨幣の改鑄で切り抜けようとしたが、失策であった。

吉宗は、先に出されていた慶安の御触書などで、農民を一層厳しく統制。享保の改革では、質素儉約、新田開発や、綿、菜種などの耕作を奨励した。

しかし、ここ秋田藩では質素儉約など出来ようがない。元々が質素な生活を虚げられてきた。質素というよりも、困窮極まりない生活である。例えば百姓は、茅葺の家で、手織りの麻や木綿の着物だけで、年中過ごす。食べる物といえ、麦、粟、稗などの雑穀に、大根や葉物山菜を入れ、嵩増し粥として流し込んでいる。その

食料とて庄屋からの給金、小作人は小作料を天引きされ、一人当り麦粟などで、一日四合ほどの飯となる。味付けは塩だ。味噌醤油などは贅沢品、とても高くて使えない。

家といえ、庄屋の貸地に、自力で掘建て小屋を作る。囲炉裏の周りに筵や薦を敷き、その上で寝起きし、飯も食う。厳しい冬は藁布団が暖かい。土間にある水屋（台所）には、水瓶と桶、鍋があれば飯仕度が出る。茶碗とて、椀と竹箸でこと足りる。

母屋から二間ほど離れた所に、廁を作る。穴を掘り、二本の丸太を渡し、四方に礎石を置く。床を組む。壁と屋根を組み上げるのだが、三方が壁なら上等だ。出入口に戸はない。風通しはいいが、冬は堪らない。しゃがんでいる尻から熱が奪われる。用足し後は縄で拭く。紙など見たこともない。

廁には、備え付けの縄と木槌がある。木槌は、冬の黄金水の迫り上がる頭を砕き、用足しが出来る寸法を確保するのである。

百姓は大便秘で、小便是肥山（堆肥の山）です。女も肥山で半立ち小便、片手で着物を尻上に捲り上げる。

この肥山が大切な財産となる。まず藁を敷き、廁から汲み取った糞尿をかけ、何層にも重ね、堆肥とするのである。肥山の周りには溝を掘り、尿溜まりを作る。その尿を汲み、畑に撒く。肥料としても重宝である。

一方町屋の廁は、立派なものだ。糞尿壺に五斗か十斗ほどの樽を埋めている。屋根も母屋と同じ板葺き。壁もしっかりしていて、風が微かに通る気密で、出入口には戸がある。

大きな商家になると、廁専用の尻拭紙を使っている。用足した紙は取っておき、古紙として売る。

二

権兵衛は、十三歳になったばかりの権蔵を引き連れて、町屋の糞尿を汲み取りに行く途中だ。権蔵は体がまだ小さいけれど、立派な働き手で、一人前の勘定が出来るほどだ。

町屋まで、二里ほどの距離だが、夜七つ（四時）に家を出てきた。半分も来た頃だろう。

「えで（父）、小便したい。道端でもいい」  
「勿体ない。大八の上でやれ」

権兵衛は大八車を止め、肥樽一個の三寸角栓

を取り、この角穴めがけて用足しさせる。権蔵は傾斜の荷台から、角穴めがけて放尿し、見事に入れた。

「えで、ここにも小便樽があればいい」

「そうか。通る人も小便したくなるか」

二人は残り一里ほどを四半刻ばかりかけて、町屋の商家を目指した。

道端には露の臺が開き、葉を付けている。もう雪も融け、忙しい時期を迎えたと知らせているようだ。

商家は間口六間、奥行き十間。こちらでは大店で、奉公人が四人も居る。呉服から金物、乾物などを商っている。権兵衛と権蔵は、商家の裏庭から厠へ、早速荷を解き、肥樽十個を汲み取り口に並べる。権蔵に柄杓を渡し汲み取らせる。

「権蔵、溢すでないぞ。角穴に注げ」

権蔵は手を休めることなく、柄杓を動かした。た。

「商家の糞尿は、色が違う。硬いのやら軟らかいのまである。全体が黄金だ。俺たちは、雑穀しか食っていないから、黒く硬い。こんなにも違うものか」

「えで、いい臭いだな」

「臭いが新しいだろう。米の飯ば食っているからだべ」

「米って、旨いのか」

「それは旨いさ。白いおまんまと言っくらいだ」

「食ってみたいな」

「早くしておくれ。臭くて堪らん。店先に線香まで焚いているんだから」

権兵衛は番頭に畏まりながらも、買い取り価格の交渉を始めた。五斗で二十銭と切り出すが、番頭は三十銭だと言ひ張る。去年まで三十銭だったから、引き下がらない。権兵衛は尚も交渉した。

去年水害があり、田圃が水没。それも秋田藩が、次々と山々の杉を切り出し、坊主山が増え荒れ果てた。又、東風が吹く年で、冷害となり、百姓は糞尿の買い付けどころでない。夜逃げする者まで出て、値が下がったと強調した。番頭は渋々折れ、五斗二十二銭で纏まった。

「おお臭。おまえまで臭いよ」

「相すみません」

権兵衛は、番頭の後姿に一礼しながら、（糞たれ）と小さく言った。

権兵衛親子は、大八車に肥樽六個を満杯にし、四個は空樽。一個分は御負けだった。

「えで、腹減った」

「帰れば、五つ半（九時）頃だべ。朝飯になるさ。あっぱ（母）が作る飯は旨いぞ。塩加減がいい」

「んだな」

そんな話をしながら、四つ辻まで来た。権兵衛は算段してみた。

「この辻に小便樽を置けば、年に五、六回なら三十銭として、小屋を三十銭で作れば、元が取れそうだ。いいかもしれない」

「権蔵、商いを知りたいか」

「んだ。金儲けしたい」

「そうか。権左に教わるといいよ」

権兵衛は、道端の路に目を向けた。根が太く、大きな葉。何処へでも根付く。露は強くていい。茎は食える。また塩漬けにしておくか。

この時代「胡麻の油と百姓は、しぼればしぼるほど出るもの」という言葉が出来たほど、年貢に苦しめられていた。飯は日に二度、朝と晩だけ。村に刻の鐘など聞こえないが、体が覚え



ている。日の出と共に田畑へ行き、日の入りに帰る。

権兵衛親子は、真面目に働き、貧困から抜け出そうと跪かかいている。

### 三

享保三年（一七一八）四月のある日。権兵衛は庄屋に呼び出され、裏庭で待っている。大きくはないが、がっちりとした体格で力がありそうだ。日焼けした顔に大きな目を広げ、辺りを見廻す。そこには祠が祭られ、松や紅葉の木々が手入れされ、奇麗な庭となっている。もうじき桜が見られるかな。

「権兵衛。よく来てくれたな」

「へい。金兵衛様、何んだしべ」

「五反歩の田を譲るから、自作農でやれ」

「我が、自分の田圃を持てるのだしか」

「そうだ」

権兵衛はよくよく話を聞いた。去年秋に川の氾濫かわかきがあり、川欠（堤防の決壊）が起きた。五反歩の田が水に浸かり、石や泥が入り込んでしまった。幸い稲刈後だったから、米は守れたらしい。この田を、二十両で買って作れ。との話

だが、この田は元々久兵衛一家が小作していた、曰く付きの土地だ。

一家は年貢も納められず、借金塗まれになり、娘を売り、農耕具まで手離し、夜逃げ同然に村を離れた。とても水没した田を、作り直す力もなければ、人手もない。やむを得ない状態に陥っていた。村全体の小作農民は、多かれ少なかれ、久兵衛に近い生活であり、誰にも責めるなど出来ない。

権兵衛は考えた。二十両もの大金を借金してまで、やる必要があるのか。支払は、十年は待つそう。それも利子なしでの事だ。盆と暮に貯めた金を持って来い。とは言うが、種籾こめだって買わなければならない。又借金が増える。今まで通り、小作も続けなければ食って行けない。一家に余力はあるのか。

「庄屋様、よくよく考えますだ」

「そうか。待っているぞ」

権兵衛は頭を抱えたまま、屋敷を後にした。曾祖父ひいじじだって、驚きのあまり生き返るかもしれないほどの大事なのだ。皆は自分で作る米が食えると、大騒ぎになるだろう。しかし、家には帰らずに町に向かった。

朝露が飛び、やっと春の温もりが感じられる

四つ（十時）刻ときか。辺りの田では、ちらほら田起こしが始まったか。人が鍬を振り上げる様が遠目に見える。

権兵衛は囲炉裏の火を明かりに、晩飯を食いながら、今日庄屋と和尚を訪ねた話を聞かせ、相談し、意見を求めた。権助じっちゃは、任せろ。あっぱも、やりたいようにと。兄権左衛門は、借金を返す目処でもあるのか、と心配する。次男権太は、二人分働くからやるべと言う。三男の権蔵は、年に二両返したとしても、十年かかると言う。長女花と次女トメは、一杯手伝うと言ってくれる。

「よし、やるべ」

「んだ、んだ」

一家は父に従った。権兵衛は水没した田を見に行く、誰を向けるかも考えていた。

「花、和尚から帰り際に貰った蕎麦の実を預けるな。一杯殖やして、嫁に行く時に持って行け」

「花よかったな。今から嫁入の準備だ」

あっぱは、二人の娘を両脇に抱え、笑顔で話すと。

「トメも欲しい」

権兵衛一家は八人家族。当時としては、普通の人数だ。権助とて、五十六歳になって、隠居などしていられない。まだまだ体が動く。大事な稼ぎ手だ。何より山からの食料調達が上手い。中でも落は太く長く、茎は二寸もある。丈は二尺五寸もあろうか。齒応えが良く、旨いのだけを取って来る。まだまだ生きてもらわなければならない。

「よし、明日はじっちゃんと権蔵を連れて、田圃を見に行くから、もう寝るべ」

子供達は、それぞれの藁布団に潜り込んで行く。あっぱが囲炉裏に向い、薪を落とし燠おきにする。

「あっぱ、なんとか成るさ」

「んだな。皆が病にかからないように、神様仏様にお願ひしますだ」

権助も頷く。

もう暮六つ（十八時）は過ぎたろうか。辺りは暗く、四月というのに、夜の冷えが漂って来た。

田の下見に行くその日は、朝から雨だ。藁わら葎みのを準備し、それぞれの仕事を手配りする。

「権左。今日は雨だし、渉はからないだろうから寺

さ行けや」

「いいのか」

「権左、皆の分も覚えて、妹らにも教えてやれよ」

「あっぱ、ありがとう」

母は皆の朝飯を作る。拳骨ほどの大きく丸い、そして雑穀だらけの赤茶けた粒の握り飯二つ、大根の漬け物を添える。それでも腹の足しになる。

権兵衛は常々、子供達に言っている事があった。

「おまえらはこれから先、字の読み書きが出来ないと駄目だ。女だって読み書き出来れば、どこさだって嫁に行ける。小作だけでは食って行けない。何か新しい事をやらないと駄目だ」

言うからには、せめて長男だけでも、学問を身に付けさせたい。小さい頃から、機会を作っては寺に行かせていた。

この時代としては、斬新な考えだ。……何をかいわんや、和尚の受売りである。

水没した田までは、家から半里ほど歩く。山が近く迫って来る。背丈の低い雑木と雑草しか見えない。杉林は見当たらない。

「ここか。半反が十枚か。じっちゃん、どう見るべ」

「んだな、十枚の内、四枚は酷い。玉石が多いな。残りは泥と枝、柴が多いな。ぬかるし、手間がかかるぞ。石が小さいだけ、まだましだ」

「じっちゃん、川欠の所を見てくれ、俺らは、もっど見るけ」

権兵衛と権蔵は念入りに歩く。水の取り入れの堰せきも潰れている。長さ二十間もあろうか、泥上げが必要だ。

「権蔵、先き立ちでやれるか」

「これを、当り前の田に戻すだべ」

「そうだ」

「半反を一人で一ヶ月、二人では……約十ヶ月はかかるまい」

「そうか。来春に間に合いそうか」

「あの玉石さえ退かせば、何んとか成るべ」

「よし、先き立ちは権蔵に決めた」

田圃の畔道の端に、落の臺が花開いている。こだけ遅い。きつと泥を被ったからか、日当たりが良くないのか。

川欠を見に上流に向った、権助がなかなか戻って来ない。権兵衛は（又、山に入ったな）と思しながら、他の田も見る。隣の田は、才の神の

久三の田だな。水没の被害は、少かったようだ。

砂が見る程度だ。堆肥は撒かれているが、少し少ない気がする。まだ田起こしを始めていない。何かあったのかな。雨だから休みか。ちょっとだけ心配した。

「見て来たど。川欠は大して大きくない。けど川欠から十間ほど下流に問題がある。左岸の middle 州に、大きな榎の木が邪魔してる」

大きな川幅でもないが、増水すると、榎の木の枝や草、倒木が引っ掛かる。それが原因で堰を作り、溢れさせたのだらうとの話だ。今まで、誰も気付かず、手を掛けなかったのか。榎の木を切れば、この先は洪水にならないだろうと判断してみたんだ。

「ほれ、うどとごごみ、あいこだ。まだ早いなあ」

「じっちゃ、山菜取りの名人だな」

権蔵が褒めると、どうだとばかりの笑顔を見せた。

「雨は昼近くには、弱くなりかけて来た。三人はあっぱと権太のいる、小作地へ向かって足を進めた。」

#### 四

権左衛門は、和尚の講話を聞き胸を躍らせた。十九歳になったが、城のある町など見た事もないから、江戸は大都市で、大きな繁栄だと話されても、想像が付かないし、比較する知識がない。

「今や商人が、大名に金を貸している時代。百姓だって、金を出せば武士になれる。百両から百五十両で苗字帯刀御免だそう。これからは武士でない。米でもない。金銀を稼げる仕事だ。そう確信する権左衛門は胸の高鳴りを抑えられない。背丈四尺七寸ほど、肩幅の広い体で胸を張り、大股で歩く。」

権左衛門は寺からの帰りに、寄る所があった。農耕具を作る相談に乗ってもらう鍛冶屋の所だ。

「直五郎さん。権左です」

「いらっしやい。お父は出てるけど、直に戻りますから」

「待ってもいいですか」

「どうぞ。お父も喜びます。今お茶をもって来ますから」

権左衛門は唐鋤からすきに新たな工夫を凝した、新しい農耕具を考えていた。昔ながらの鋤や鍬での

田起こしは、骨が折れる。かといって唐鋤は庄屋しか持っておらず、小作人は賃貸りして使うしかない。唐鋤は刃の両方に撒くり上げる。碎土も小さい。馬鍬では使い勝手が悪く、田起こしには力不足だ。馬に引かせ、耕やす『馬耕』を考えていた。

「権左衛門さん。お茶をどうぞ」

「有り難い。お米さんのお茶は旨いす」

権左衛門は、精一杯のお世辞を言った。お米ははにかみ、頬を少しだけ赤く染めた。権左衛門に気付かれまいと一礼した。

お米は十六歳、三年前に母を亡くしてから店の手伝いもしている。

「権左さん、来てたかい」

「刃先はどうです」

「まだだ」

「考えたんですが、起こした土が、片方に撒くり上げられるように、へら（案内板）を付けたいただきます」

「へら……」

直五郎には、権左衛門の力説する意気込みは分かるが、へらだとか、撒くるとか。良く飲み込めていない。三角刃で掘り切りし、片方に撥ね上げられる湾曲したへらが欲しいと、身振り

手振り、仕舞いには土間に絵を書いて説明される。

そんな権左衛門の考えた、馬耕が完成すれば、高く売れるはず。何とかして作りたい。直五郎も次第と力が入って来た。

今朝は霧が深いようだ。先が見え難い。しかし今日から自作農を目指して、一家総出で田に向かう日だ。小作地に行く前の朝仕事。まだ薄暗い七つ半（五時）頃から取りかかる。石拾い、砂利掬い、柴や枝集め。それぞれに別れ、進める。

一刻半（三時間）ほどすると、花とトメは家事仕事で家に戻る。権助と権蔵の二人を残し、四人は小作地の田起こしに向かう。

もう日は昇り、朝五つ（八時）当たりだろうか、そろそろ朝飯だ。権蔵と権助は畔道に腰掛け、握り飯を食っている。

「じっちゃ、明日から櫓そりで運ぶべ」  
「ぬかるど」

「三寸位の丸太を並べて、その上を滑らせ、引張るべ」

「なるほどな、明日は櫓と鋸を持って来るか。」

中州の木も倒さないとな」

二人は石拾いをもくもくと続ける。足を取られながら、石を抱え畔道に出し、川まで捨てに行く。もう何十個、いや何百個と捨てたろうか。まだ作業の跡が見えない。

昼八つ（十四時）頃になると、流石に二人は疲れて来たのか、畔道に腰掛けたが、立たない。もう体が汗と泥まみれだ。

「じっちゃ、明日の朝から一枚の田さ、二ヶ所に石を集めてもらうべ。で二人で櫓に乗せ捨てるべ」

「仕事の手分けか。それもいいな」  
権蔵は知恵を絞り、如何に楽しんで仕事を進めるかを考えて、動いていた。

暮六つ（十八時）頃には、権兵衛ら四人が戻って、晚飯前の一仕事の手伝いに来てくれたのだ。権兵衛とあっぱは、二人の仕事振りを褒める。  
「良く頑張っているな。意外と早く進むかもしれないぞ」

権蔵は明日からの段取りを話すと、あっぱは微笑みながら聞いている。権兵衛は、そういう手順で行く方法か。やって見るべと反対しない。先が長いから、焦るな。休み休みやれと言って

くれる。

六人は日暮れまでの、短い時間も惜しんで、石拾いを又始める。早速権蔵の計画通り、石の山を作るように集める。それも出来るだけ、畔道に近い辺りに纏める。石山は、まるで賽の河原の石積みに見える。薄暗いから少し不気味だ。先を案じる権助が、ふとそんな気持ちになった。

田の復旧作業は休みなく続けた。早く進んでいる。毎朝一刻半ほど皆で石集め、柴や枝は畔道に置く。ここまで手伝ってもらうと、後は権蔵と権助が捨てる。水口の堰の泥上げも手掛けた。鋤で泥を掬い、桶に入れ天秤棒で担ぎ捨てる。やはり道具だ。仕事が早い。

田の復旧は、当初の見積より早く、六ヶ月でなんとか終わった。しかし季節は十月に入った。もう稲刈りが始まる頃に植付けする種などない。雑草も目立って来ている。このままそらすのも勿体ない。

此の頃、権助じっちゃが田仕事を休みがちになって来ている。

十月になる頃、鍛冶屋の直五郎と、権左衛門が工夫した、馬耕が出来上がっていた。権兵衛

は、庄屋金兵衛に話を通し、試し掘りの土地と馬を貸してもらう事にした。

馬耕の試しは、十月十七日大安の日と決まり、土地は権兵衛が復旧に苦勞した、五反歩で実施となった。

この日は朝から晴れて、青空が高く、どこまでも続く。百姓にとつては、稲刈りが始まる喜びの日となった。

朝四つ（十時）に皆が集まった。庄屋金兵衛、鍛冶屋の直五郎とお米。権兵衛親子。見物人で、小作仲間五、六人が来ている。

馬耕を操るのは権左衛門。馬の手綱を引くのは権太。二人は前打ち合せて手順を話し合っている。馬耕の重さ約二貫、重い。櫛の二又材を利用、鋤先とへらは、直五郎が工夫して鉄を打ち込んだ。

試し掘りの場に似付かぬ娘、お米が立っている。決して着飾ってはいないが華やいで見える。帯が明るい。頻りに頭を下げ、権兵衛一家に挨拶をし、花とトメには楽し気に話している。あっぱは、畑に植えてある源氏菊（食用菊）に似て、赤紫色に咲き誇る美しさを感じていた。

試し掘りが始まった。馬の手綱が引かれる。

馬耕がくい込み、右側に田起こし、碎土され盛り上がる。深さ一尺も溝が出来る。三本鍬の倍は深く掘れている。馬耕のくい込みがいい。撥ね上げのへらの曲りもいい。

隅にくると、力が入る。馬耕を持ち上げ、直角に向きを変え、へらを突き刺す。馬の向きを変えるのに、大きく弧を描く。直線は比較的進める。四ッ隅だけは、どうしても耕せない。唐鋤と同じだ。手で耕すしかない。

一刻（二時間）も経つたらうか、半反の田二枚を耕作した。人も馬も息が上がって来た。休ませなくては、赤毛の馬が汗だらけで、茶と胡麻毛になっている。

「権左衛門、流石だな」

「庄屋様、まだまだ工夫が必要です。持ち手と曲がるときの馬耕の重さも、もう一工夫します。庄屋様、これからは半反の田より、一反歩で仕事した方がはかどるし。あの仕切畔を取っ払ってもいいですか。馬耕なら、大きな田ほどいい。真すぐの方がいいす」

権左衛門の話には力が入っている。馬耕に満足しているが、考えながら仕事し、尚改良点を探っている。

「好きにしろ。おまえ達の田だ」

金兵衛は満足し、皆に声掛けして帰る。あっちこっちの田を覗き、米の出来具合を見て行く。今年の出来は並みの良かな。

「権兵衛は息子を鷹に育てたな。金は間違いない。金は間違いない。金兵衛は息子を鷹に育てたな。金は間違いない。金兵衛は息子を鷹に育てたな。金は間違いない。」

権兵衛一家の身分が小作農でなければ、いい話もあるのだが。惜しい。あれこれ考えてしま

季節は涼風、薄の穂が弾ける頃。これからの作業は、稲刈り後の挟さ掛け、天日干し、脱穀、藁仕舞い。まだまだ仕事がある。早くしないと、雪を掴んでしま

## 五

江戸のある両替商の店に、大層武骨そうな、六十過ぎにも見える武士が、金を借りに来ている。

「主を出せ」

「ですから、先程から申し上げております。今日は寄り合いで、遅くなりますから、一番番頭の私が伺います」

「仕方ない。身共は、陸奥の国のさる藩の執政

付勘定方、松沢金石衛門である。戦場を駆けること十数度、その度に鎗一本で、手柄を立ててきた名門である。この度、所用で五十両ほど入り用となり、武士が頭を下げた願う。五十両を用立ててくれ」

「話は分かりました。では質物は」

松沢家は質実剛健で、金には疎い。忠義一筋の家柄。たかが商人風情が。あくまで押すつもりだ。

「そんな物ない」

「困りましたな」

「身共の松沢家は、百俵三人扶持の家柄ぞ」

「お武家様、五十両に見合う質物がなければ、お貸し出来ません」

「では、当松沢家に代々伝わる家宝の刀、慶長元年、甲州の兼景が鍛えし業物である。これでどうじゃ。百両にはなる代物じゃ」

「手前どもは、刀屋ではありませんから、刀の質物はお断り申し上げております」

「ならば、何が入り用か」

「はい。扶持米株を入れて頂きます」

「馬鹿者。扶持米がなければ食って行けまいに、戯けた事を申すな」

「では、五十両の金をどのように、お返し頂け

るのでございますか」

「それは、いろいろ手立をこうじて返すわ」

「では、もしもですが、万に一つお返しできない場合には、如何になりましょうか」

「その時は、……その時は腹を切る」

「とんでもございません。お武家様がお腹をお召しになられても、金は返ってきません。どうか、ご勘弁を。他をあたって下さいませ。刀屋など如何でしょうか」

店先で、二人のやり取りを聞いていた商人達は（これだから侍は困る。借金を返せないから、腹を切る。とんでもない、その前に、無礼者扱いに鈍ら刀を振り廻す。初から返す気など持っていないだろうに。桑原、かわりたくない）と口には出さないが、そう思って侍を軽蔑していた。此の頃より、各藩、大名は商人から借金をしていた。中には数万両の借金を、踏み倒してまで家を守る大名まである。その為に潰れた商家も出ている時代。武士も地に落ちたものだ。「武左衛門」と呼ぶそつな。

## 六

馬耕の試し掘りから、一ヶ月ほどたった十一

月。もう雪でも降りそうな鉛色の空の日、鍛冶屋の直五郎は、庄屋に更なる工夫を凝らした馬耕の売り込みに来ている。

「金兵衛様だから、七両でどうです」

「高い、高い。小作人に耕させても、たいして金はかからない」

「金兵衛様、小作人と比べないで下さい」

「どうしてだ」

「一反歩を小作人に作らせたとして、十日はかかるだ。この馬耕なら一日で稼げます。余った時間は、畑を耕せる。畝まで作れます。いい物が出来ました。いの一番に金兵衛様に持ち込んで来ました。特別に、値引いておりません。見たでしょう。試しの田起こし、我だば、嬉しくて涙を流しました。庄屋様だって、分かっているでしょうに」

「おまえは鍛冶屋か。商売が上手いな」

「ただの鍛冶屋です」

「分かった。七両で買うが、その代わり馬耕は、儂が一手に売る。どうじゃ」

「金兵衛様、もうあっちこちの庄屋、名主様から、声が掛っているので、こればかりは、ご勘弁下さいまし」

「もう、そこまで評判が立っているのか」

金兵衛の目論見は遅かった。

「はい。こんなにも便利な農耕具は他にないです。稼ぎますだ。作る方が間に合わなく、困ってますだ」

「買うから、もっと負ける」

「分かりました。五両と種籾三俵でどうで」

「うん……分かった。置いて行け」

直五郎の商売気で上手くいった。試作に一両、借金と手直して一両。租税が四割だから二両、

占めて四両。残り一両と籾三俵で二両としても、二両程残るはず。まずまずの儲けだ。

権兵衛一家にも、去年は思い掛けない出来事が舞い込み、皆で協力し合った年だった。今年の享保四年（一七一九）は、春から自作地で田植が始まる。まだ少し雪が残る三月だが、雪融けを待ってられない。堆肥も撒き、雪融けを促す。例年通り小作地も田起こしが必要だから、どっちかをずらし、段取り良く進めないと、苗作り、代掻き、田植の作業が一遍に重なりかねない。

田起こしには、庄屋から馬と馬耕を賃貸して一両と決めた。小作地一町歩、自作地五反歩、畑の一反二十畝を耕した。田一町五反歩の代掻

には馬鋤で均した。田植えまでの準備に、休んでなんかいられない。苗が育ち待ってくれない。朝早くから、足元が見えなくなる晩まで働いた。権兵衛は、畔道に芽生えた路の臺など目に入らない。たとえ踏み付けても気にもしない。けれど、路の臺は伸び、白い花を咲かせ、やがて大きな葉を付けて行く。

今年には苗作りの種籾を、庄屋から借りないで済んだ。去年十一月に、直五郎から届けられた種籾三俵があった。うち二俵は種籾として寄せ、残りの一俵は正月の祝いと、権左衛門の馬耕の発案工夫と完成を祝った。

一家は数十年振りに、白まんまを食った。一俵が三斗五升だから、十日も食えた。権助じっちゃんは、「もう死んでもいい。百姓がやっと自分で作った米を食えた。」と涙を流した。あっぱは、湯気の立つごはんを、神棚と仏壇に揚げ、長く手を合わせ、何かを願っている。

子供達は、生まれて初めての白まんまだ。もう大変な騒ぎだ。精白米は綺麗な米粒だ。光っていると感じている。炊いた時はさらに感動し、匂いがいい。わざと吹き上がる湯気の中へ顔を入れ、熱い。と言いながらも何度も匂いを

嗅ぐ。炊き上がったごはんを口にすると、皆笑顔で、言葉も出ない。大根の漬物だけで、何杯もお代わり出来る。権太は七、八杯も食ったろうか。体が大きいだけに、良く入ったもんだ。「やっぱり、米の飯は旨い。我だば一日三回でも、五回でも食いたい」

「好い加減にしろ、食った分、稼いでくれ」

「ああ、我に任せろ」

大きな体でおどけた顔を作る。権太は一家で一番の力持ちだ。

和やかな、更なる元気が出る白まんまは、甘かった。

六月、田植がすべて終わり一息付けた。今度は、花を先立で三升の蕎麦の実を畑に植えた。去年一握の蕎麦が三升も取れ、今年は一粒も食はず撒いた。秋までには収穫に成る。花は蕎麦が食えると燥ぐ。

梅雨を迎え、苗は活着し育ち出して来た。この頃より、田圃の雑草取りが始まる。朝から晩まで、腰を折り、苗の根元を掻き廻し、草を取る。骨が折れる。腰が曲り伸びない。しかし毎日続く。

権兵衛は朝と夕に、田圃の水を見に廻る。苗

の浸り具合、水の温さ、水口の取り入れ、止水などの調整で目が離せない。

水で、隣同士又は部落内で喧嘩が起きる。一人だけ水入れたとか、下の方へ流さないとか。田の水が抜かれたとか。しばしば小競り合いが起きる。幸いにこの田には、川からの水を引いているから、切れない。

すったもんだしながら、盆頃には稲穂も花を咲かせる。よくぞ育ってくれた。これから二月ほどで穂は実を膨らませ、黄金色の田圃に色付いて行く。害虫、台風も心配だ。

十月稲穂は垂れ下がり、平年並の実りか。まづは一安心。稲刈りが待ちどおしい。

畑では一握りの蕎麦から、二年目でやっと一俵の収穫になった。来年こそ、花の嫁入りには、俵で持たせてやりたい。

冬は間違ひなく訪れる。どこの百姓家も、縄ない、筵作り、草鞋、竹籠、町屋の内職など、銭になる仕事なら何でもやって、生きて行かなければならない。例え草や木の根を食っても。

庄屋は今頃になって、「豆や小豆、麦を植えろ、銭が稼げる作物に切り替えろ。」と言いついてるから、宗旨がえでもしたのだろうか。

## 七

自作地の田植も二度目。肥山の堆肥を撒く頃は、露の臺が芽を出し、白い花を咲かせる。よくぞ今年も咲かせてくれた。雪融けと共に芽生え、百姓仕事の始まりを知る花だ。

今年こそは、豊作を願って田植を終えたばかりの六月。権左衛門一家に、とんでもない祝いの舞い込んでいる。

「頼むから。権左衛門さんを、婿に下さい」

「だども、百姓の子で、長男だからな」

「そこを曲げて、お願いに来た。娘も望んでいる。ここに支度金五両。祝い金十両を持って来た。何もいらぬ。体一つで来てほしい。どうかお願いします」

驚いた。今まで聞いた事も見た事もない、支度金で、祝い金も大金だ。

「どうして、ここまでなさるんで」

「娘の為で、鍛冶屋の跡取りの為です」

「権左、どうするべ」

「我だば行く。お米さんの入れてくれるお茶ば、毎日飲みてえ」

「おお、良くぞ言ってくれた。有り難や。有り難や」

権左衛門は、うすうす感づいていた。直五郎の話の端ばしに、お米に婿がほしいとは聞いてはいたが、それにしても行き成りの話だ。少しだけ期待を抱いていただけに、嬉しかった。

直五郎は、一年足らずの間に、馬耕が七台も売れ、鼻息が荒い。今度は娘の幸福も考え婿取りに来たのだ。

「直五郎様、手前こそ有り難いです。去年の種籾三俵は、手を合わせ感謝してまず、ありがとさんでした」

「何んの、権左衛門さんの人柄に惚れたし、新しい考え方にも感心しているんだ」

婚儀の話は直ぐに纏まった。この月末には、婿入りする。祝いの儀式などなく、内々だけの酒を振るまう程度にする。出来るだけ簡素にしないと、役人に咎められる。

新緑の色がまだ残る六月末、稲穂は伸びている。そんな吉日に権左衛門は婿に行った。

まだ祝い酒が醒めやらぬ二日後、今度は花を欲しいと言って、隣り村の庄屋が仲立ちで来た。自作農の安次郎の嫁にと願う話だ。庄屋が、小作人の家を探ねるなど、ありえない話である。

「花はまだ十二のおぼ子で、まだ早いです」



「いや、安次郎は早い内から、家に馴染んでほしい。大事にするからと言っているよ。働きの評判者だ」

仲立ちの庄屋が、何だかんだと言って、引き下がらない。結局権兵衛が折れるしかない。

「許嫁として決めます。けど嫁入りは、十四の秋にさせて下さいまし」

「来年の嫁入では、駄目かね」

「こっちにも段取りがあります。十四の秋まで待って下さいまし」

「うん。……」

花の嫁入り話は、やっと庄屋を納得させた。させたというより無理押しした。言われるままが癪に障り、少しは我を張りたかった。

「あっぱ、有り難い話だが、目出度いのかな。権左をやったばかりだし」

「安次郎さんは、十八歳で年頃、人も良さそうだし、早くしてやったら」

「まだ早い」

「あれ、我でも十三で嫁に来たしよ。あんだだば、十六の童し子に見えやしよ」

「うるせえ。蕎麦を持たせられないから、日延べしたんだ」

この話には、続きがある。安次郎は百姓の片

手間に、山を開墾し蕎麦栽培を始めるらしい。

蕎麦と小豆を仕入れ、蕎麦饅頭を作り売り歩いている。今はたいして銭にならないが、商いとしての見込があるらしく、行く行くは、蕎麦と小豆を自分で作り、商売として店を持ちたい。読み書きが出来て、蕎麦まで栽培出来る嫁は、花しか居ない。是が非でも嫁に迎えたいと、庄屋を動かしたのだと聞く。

庄屋金兵衛から買った、土地代金の返済に目処が付いてきた。二年で五両を返し、直五郎からの祝金は使わず隠してある。

権兵衛一家にも新しい風を入れる時だとばかりに、次男権太に嫁を迎えてやりたい。十八歳の男盛りだ。この話を庄屋に持ち込んだら、金兵衛は心良く引き受けた。がおまけが付いた。

「権兵衛、権太には必ずいい嫁を世話するから、安心しろ。ところで、権蔵はどうしている。」

「はい。今日は田圃の草取りだし」

「いやいや……どこぞから婿の話でも来ているのか」

「そんな話ない。まだ十五だし」

「どうだ。早口村の庄屋作治処へ、養子に出さないか」

「養子だしか」

「そうだ。庄屋仲間からの噂を聞き、子供のいない作治は、権蔵が事の他気に入ったとき。聞き廻っただろうな。どうだ、作治は豪農だぞ」

権兵衛には返事など出来ない。あまりの驚きで、才の神の狐に摘まれたごとく、帰りは泣いたり喚いたり、どこをどう歩いたか分からないほどだった。

二ヶ月も経った頃。田圃は稲刈り準備の水切り、田の乾かしに入っている。

長木村中の噂話に上がる、権兵衛一家の話の種は切れない。

権左衛門は鍛冶屋に、三十両もの大金で売られたとか。いやいや、二代目直五郎を名のり、新しく工夫した大八車を作り、大層儲けているとか。権太を庄屋に売り込みに行ったら、権蔵を買うといったとか。花については、隣り村で食えない饅頭を、売り歩く為に嫁にやるのだとか。あの一家は子供を売り捌いてまで、自作農になり、土地を買い漁っているとか。

近郷の百姓たちは、どこから聞いたのか、噂話に尾鰭を付け、面白おかしくうっぶん晴らしか。

「あっぱ、子は宝だな」

「けど、小糠三升あったら、婿にやるなど言う  
だで、権蔵はやらないし」

「婿でねえ。養子だべ」

「尚悪いべ。家の子でなくなるし」

「何、直ぐに返事する訳でない。じっくり考え  
るべ」

「はい。権蔵はやりません。家の子らは、雑穀  
しか食ってないけど、立派に大きく成りました  
だ」

「んだな。おまえが頑張った御蔭だべ」

「あんだも、真面目で、正直にやって来たし、  
自作農も叶いそうだなんし」

「ところで、トメは何をやりたいだべ」

「鶏屋さんに成りたいって」

「鶏か。……卵か。肉か。大きな小屋もいるべ」

権兵衛一家は、この秋の収穫が待ちどおしい。

米は豊作か。蕎麦は何俵になるか。畑の大根や

菜葉は。心配ではあるが、希望を持っている。

享保六年（一七二二）八月に、秋田藩執政

やまがたやすもり  
山方泰護によって、従来禁じられていた、新し

い農業生産物の耕作を認める布令が出た。しか

しすでに遅く、農村は貧富の差が大きく、米中  
心の経済は崩壊しかけている。

この先、天災や飢餓が人々を苦しめるが、強  
かに生きる百姓が村々に居る。

来年も畔道や山に、露の臺が芽生えるだろう。  
きっと花を咲かせてくれる。

#### 参考文献

日本の歴史17

中央公論社

トイレは笑う

TOTO出版

大江戸侍入門

洋泉社

日本刀・刀装事典

里文出版

# 入選 ほうとう 棚頭の人形 ひとがた

小坂町 藤原 涼

「まもなくオーブニングセレモニーが始まるので、駐車場係はいったん解散します。二時間後に再集合して下さい」

小さな劇場に掲げられた大きな立て看板の前は、この街では珍しい人間国宝の舞台公演ということもあって、人でごった返していた。駐車場には、遠くの県外ナンバーもちらほら見受けられる。

「ボランティアスタッフは、後ろの立見席であれば、空いた時間に公演を見てもいいってよ。どうする？」

「いや、文楽なんて、見てもさっぱり分からないだろ。この辺で適当に時間つぶすわ」

私はこれまでも何度か、友人に誘われて劇場の手伝いをしたことはあるのだが、普段こういった場所に足を運ぶことはあまりなかった。自分はいわゆる体育会系で、およそ舞台に興味をもつことがなかったからだ。

「その駐車場係二人！手が空いたならお客さ

んの誘導を手伝ってくれ！」

「あ、はい！」

今回は一番簡単そうな駐車場係を選んだものの、指示に従わない高級外車に辟易していたところだったので、むしろ幸いとはかりにスタッフリーダーを追いかけた。

舞台あいさつは劇場前のスペースで行われることになっていた。少しでも近くで見ようとひしめく人たちを、ていねいに誘導していく。ここでは、日々コンサートや演劇などが開催されているが、屋外での舞台あいさつは珍しい。初の文楽公演なので、少しでも観客に親しんでもらおうと企画されたものらしかった。

リーダーの指示を受けながら入り口付近で待機していると、お弟子さんらしき人が文楽人形を運んできた。木の台に据え付けられた女人形は、思いのほか大きい。一メートル三十センチほどはあるだろうか。少しだけ口を開けた白い面は、無表情に空間を見つめている。初めて目にする文楽人形は、少し薄気味悪く感じられた。やがて人間国宝が登場し、オーブニングセレモニーが始まった。司会者が、文楽の魅力について声高に語っている。先ほどの女人形は、人間国宝の腕の中にあつた。この人は、女方遣い

の名手とのことだった。その様子に、私は思わず目を奪われた。

人形が、耳をすませて、じっと話を聞いている。人形遣いがただ人形を持って、出番まで待機しているのではない。人形がうつむき加減に首を向け、ざわつく音の中から司会者の声を聞き取ろうと、息をひそめ耳を傾けている。

そのしぐさは、まさしく人間のそれであった。

舞台あいさつが終わると、人々の群れは劇場の中へ吸い込まれていった。開演を知らせるブザーが遠くから聞こえてくると、辺りは全く静かになった。

「俺、ちょっと中を見てきてもいいか？」

「おう、集合時間忘れないようにな」  
劇場の中に入ると、すぐに小さなロビーがある。緋毛氈が敷かれたいくつかの緑台の一つに、ちょこん、と着流し姿のおじいさんが腰かけていた。にこにここと、もの珍しげにロビーの意匠を見回している。

おそらく演者の一人であろう。今日の公演は三演目あるので、自分の出番まで待機しているのかもしれない。この劇場は、舞台裏の楽屋のスペースが限られていて、大部屋が観客席の後

方にある。大部屋の人たちは、公演時間中の客がないロビーで、よく休憩をとっているのだった。

ホールへ続く重い扉を押すと、立見席の一番左端に、スペースを見つけて移動した。さっきの人形の姿が、目に焼き付いて離れなかった。屋外の、明るい日差しのもとで目にしたせいかもしれない。

あれをもう一度、見たい。

人間国宝は、最後の演目で登場することになった。やがてその幕が上がると、あっと思わず声を上げそうになった。舞台上手にしつらえた義太夫の席にいたのは、さっきロビーで見かけたおじいさんだった。

この世の名残、世も名残

死にゆく身を例うれば

あだしが原の道の霜

穏やかなのに、地の底から響き渡るような野太い声だった。一体あの小さな体のどこからこんな声が出るのか、耳を疑いたくなるような声だった。

朗々と歌い上げるように節が続く。ナレーション

ンも、登場人物の声も、全て義太夫が一人で語る。ただでさえ耳慣れない昔言葉に、聞き取りができるか不安だったのだが、緩急はつきり演じ分ける義太夫に、その心配は全く無用であった。

そして私は、三味線が余韻の楽器なのだ初めて知った。義太夫の隣に座る奏者が三味線をつま弾くと、なんとも言えない独特の余韻があたりを漂うのだった。義太夫の声と三味線の音が一体となって、共に死ぬことを決めた男女を包み込む。「曾根崎心中」徳兵衛とお初の道行であった。

徳兵衛は頭の傘を、お初は手ぬぐいをそっと外す。お互いに視線を交わし、お初は震えながら徳兵衛の肩に顔をうずめた。そのお初を操るのが、人間国宝その人だった。お初の震えが徳兵衛に伝わると、そのこめかみからはらりと髪が数本落ちた。

その瞬間、どっと鳥肌が立った。人形なのだから、そんなはずはない。髪はもともと、そうなっていたのだろう。ただ、一連の動きがあまりにも自然で、人間と見紛うばかりだったので、そう感じたのだ。お初は合掌しながらそっと目を閉じ、徳兵衛が逡巡しながら振り上げた短刀

の刃を、その身で受けようと待っている。その人形は、先ほど見た木の台に据え付けられた女人形と、全く同じもののはずだった。だが今は、青白い照明に照らされて、その顔から薄い血管さえ見えてくるような気がした。初めて目にする光景に、ただ圧倒されるばかりであった。

\*

「まさかあんたが、国立文楽劇場の研修生になるとはね。人生、何が起こるか分からないものだわ」

「他の奴らにも、さんざん言われたよ。自分だっ  
てそう思っているんだから」

恒例の顔見世公演でにぎわう京都南座の観客席で、私は小さく呻いた。舞台上に詳しい幼なじみに、公演のチケットを頼んだのだが、こうなることは会う前から予想していた。

小さな劇場での出会いから、はや数年。研修生募集の記事を見たときは、何も考えず即座に応募した。幸いにも合格することができ、国立文楽劇場のある大阪に移り住んだ。暮らしてもようやく落ち着いてきたところで、大阪から私鉄を使えば、奈良や京都に案外簡単に移動できる

ことも分かった。

「見た目通りの脳みそが筋肉、のあんたがねえ。

雨どころか、槍が降るわ」

「なんだそれ。まるで俺が考えなしのバカみたいじゃないか」

「だからそう言ったつもりだけど。猪突猛進にも程があるでしょ」

彼女と会うのは、地元を離れて以来のことだった。幼稚園から高校まで一緒だったこの幼なじみは、黙って立っていればそこそこの美人なのだ、いかんせん口が悪い。短く切りそろえられた前髪に、さらりと風になびく長い後ろ髪が、整った顔立ちに似合っている。綺麗な日本人形のような風貌にだまされた友人を、私は何人も知っている。

「チケットの受け取り場所が分からなくて、えらい迷ったんだぞ。もうちょっと分かりやすく教えてくれよ」

「地下鉄入り口の途中にあるって言ったじゃない。迷う要素なんてないと思うけど」

「南座側だけ、その入り口が建物の中だとは聞いてない。しばらく交差点でウロウロするはめになったんだからな」

全く意に介さず、熱心にプログラムをチェッ

クし始めた幼なじみを見て、早々に抵抗をあきらめた。

「そもそも俺は、文楽の演目を歌舞伎で見たいって言っただけなのに、どうして南座の顔見世公演に来ることになったんだ」

「だからその演目があったからでしょ。いいから黙って座ってなさい。舞妓さんや芸妓さんが敷にずらり、だなんて他では見られないわよ」

「そりゃそうだけど、昼前に始まって終わるのが午後四時過ぎって、腰がどうにかなりそうだよ」

「ごちゃごちゃうるさい。あんたに頼まれなかったって、私はこの公演を見るつもりだったんだから」

思わず天を仰ぐ。趣味のことになる、一日コーヒーだけで過ごしても平気な奴だ。劇場の売店で見かけた幕の内弁当を手に入れないと、お昼を食いつぶれてしまうのは明らかだった。

開演前に、もう一度お昼のメニューを物色してよかったと考えていると、彼女はプログラムを手にしたまま、こちらをじっと見つめていた。

「すぐやめちゃうと思ってたのに、案外続いているみたいね。そこだけは、根性あるなって思ってる」

「・・・全く知識がなかったところに、一番の名人を見ちまったんだよな」

研修を、つらいと思ったことはない。なにもかもが新鮮で、飽きる事がなかった。

\*

「師匠。前から思ってたんですけど、この額の言葉、どういう意味なんですか」

「ああ、これか」

稽古が一息ついて、一室の壁に掲げられた額装を、師弟二人で見上げたときのことだった。

生死去来

棚頭傀儡

一線断時

落落磊磊

「生死の去来するは、棚頭の傀儡たり。一線断ゆる時、落落磊磊。生死の行き交う様は、祭礼の山車で踊る人形のようなものだ。その繰り糸が断たれた時、ガラガラと崩れ落ちるように・・・。これは、禅宗の坊さんの言葉だそうだが、仏教の無常観や輪廻転生を伝えているんだらう。」

ただ、世阿弥が著書の『花鏡』で、これに対し  
て面白い解釈をしている。作り物の人形が本物  
のように動くのは、繰り糸の技である。人の姿  
を象る舞も、本来は作り物なのであって、それ  
を真のものに見せるのは心である。演じるとき、  
その操り糸が見えてしまつては興醒めだ。心を  
糸にし、操る様を人に知られぬよう、日々精進  
しなければならぬ、とね」

すとん、と腑に落ちた気がした。自分がかつ  
て見たのは、この糸につながつた人形だったの  
かもしれない。

\*

「ふうん。月菴宗光の法語か」

「え、知ってるのか」

「前に見た映画に引用されてたから。科学技術  
が極限まで進んで、体の全てが人工の部品や電  
気信号に置き換えられるようになった時、人間  
を人間たらしめるものは何か、っていうストー  
リーだったけど、言葉の意味が分からなくて調  
べたのよね」

「へえ、面白そうな映画だな」

「ラストシーンで、それを持つ者と持たない者

が同じ姿で現れるところが私は好きだけど、統  
編だつてことを分かつて見ないと、一見さんお  
断りの作品かも」

とりあえず難しそうなことは、あいつに聞け  
ばなんとかなる。小さい頃からそんな存在だっ  
たが、それは今でも変わらなかった。分からな  
いことがあれば、必ず調べて答えてくれる。

「今さらだけどさ、お前って、なんでそんなに  
舞台に詳しいんだ？」

「詳しいわけじゃないよ、ただ好きなだけ。パ  
レエとかミュージカル、日本の古典芸能を比べ  
て見るのがね。それぞれの間合いというか、ア  
プローチの仕方が違つて、ほんとに面白い。  
明日は兵庫に行つて、向こうで暮らしてるお姉  
ちゃんと一緒に宝塚見るんだ」

そう言いながら、うっとりとした目をした。

「宝塚ねえ・・・」

「舞台は、芸術じゃなくて芸能なの。あの役者  
さんが見たい、あの公演が見たい、が全てでしょ。  
能のこと、『お能』とか言ってる人を見ると、  
ぞっとするわ。そういう人ほど、ミュージカル  
や他の舞台のこと見下しているんだから」

離れて暮らしているという、姉とも幼なじみ  
であったが、男装の麗人のような人で、手下の

ようにこき使われ、見下されればなしかったこ  
とは言わないでおくことにした。

「現代劇だつて古典芸能だつて、同じだよ。どっ  
ちも変わらず、人の心を打つからお客さんが見  
に行くのにね。あんただって、そのうちの一人  
なんじゃないの？」

「・・・」

そこで、開演を知らせる拍子木がチョン！と  
鳴つた。言葉が続けようとする、思い切り裏  
拳で腕をはたかれた。音を立てるな、というこ  
とらしい。

「櫓のお七」は、うら若い八百屋の娘が主人公  
の演目である。江戸では夜になると、境界を隔  
てる木戸を閉める。それは、火事るとき以外開  
け放たれることはない。お七は窮地に立たされ  
た恋人を助けようと、木戸を開ける半鐘を鳴ら  
すことを思いつく。ただし、火事を知らせる半  
鐘を、いたずらに鳴らした者は火あぶりの刑に  
なるのだ。

いま舞台の上では、お七が恋人への想いに身  
を焦がしながら、初々しい浅葱色の振袖を翻し、  
舞い踊っている。

「おい、どういふことだよ」

出来る限り声の音量を下げて、隣の席に囁いた。

「なにが」

「どうして、ロボットみたいに動いてるんだ」

「だって、『人形振り』だから。人間が、人形の動きを真似ているのよ」

確かに、お七を演じる役者の後ろには黒子がいて、文楽の人形遣いのようなしぐさをしている。役者は寄り目気味の無表情で、かくりがくりと、人形の動きをなぞらえた手振りを見せていた。

これはこれで面白いのだが、人間の動きを参考にしたかと思っただけに、少し肩透かしをくらった気がした。その気配を感じたのかどうか、隣では何やら楽しそうに笑っている。

物語は佳境に入り、お七は櫓の下までやってきた。すると、それまでびったり寄り添っていた黒子が、すうっと離れた。

(あっ)

その瞬間、お七は人間に戻った。髪を振り乱し、真っ赤な襦袢も露わに、肩で息をしながら櫓の梯子を登り始める。興奮のあまり、うまく梯子を踏めず、腕を支えにしながら上へ上へと向かってゆく。櫓を登り切ると大きく息をつい

て、一心不乱に半鐘を鳴らし始めた。何かにとりつかれたかのような、鬼気迫る表情だった。

思わず身を乗り出し、食い入るように舞台を見つめた。そんな自分の姿を目にして、満足そうに微笑む幼なじみに気がつくこともなかった。

結局、公演が終わるまで、あっという間に時間は過ぎた。

「本日は大変ありがとうございました。いろいろ文句を言ってすみませんでした」

最敬礼でおじぎをした。

「チケットが必要なときはいつでも言って。修業した成果、舞台上で見られるのを楽しみにしているからさ」

ふふふ、と笑って、口の悪い日本人形は去っていった。晩飯をおごると言ったのだが、なんでも見たい舞台が夕方からもう一公演あるのだそう、ついて来るな、と爽やかな笑顔でかわされてしまった。

\*

稽古の日々は続く。今ほど、自分の体力自慢を有り難く思ったことはない。

文楽では、人形のかしらを持つ者が右手を操作する。これを「主遣い」という。左手と両足はそれぞれ別の者が担当し、三人で呼吸を合わせながら一体の人形を操るのだ。

最初はまず足から入る。男人形は足のパーツがあるが、女人形は裾の布だけで足の動きを作るので、男人形以上に難しい。師匠と兄弟子の動きを読みながら動かなければならないので、いつでも汗だくだ。

舞台では「主遣い」が紋付袴、「左手遣い」と「足遣い」は黒頭巾となる。暑がりの自分にとって、きつい中腰の体勢よりも、この黒子の衣装の方が厄介だった。舞台の上では、額をぬぐいながら速乾のスपोर्टウエア、というわけにはいかない。クーラーのきいた屋内でも、かなりの体力を奪われるのだった。

若手中心の研究会に参加する日は楽しい。未熟ながらも、かしらを持って試行錯誤する。どうやら自分は、人形を操る際に百面相になっているらしい。悲しみのしぐさではへの字口になり、怒りのしぐさでは眉間にしわが寄る。それを見た兄弟子たちが、腹を抱えてゲラゲラ笑うのだが、自分ではよく分からない。顔じゃなくて手を動かせよ、とからかわれるので、一度公

演の間じゅう、大向うから師匠の顔だけを見ていたことがある。確かに表情は変わらなかった。そのことを兄弟子たちに話すと、再び大笑いされてしまった。

人間国宝などの特別な公演では満席になることもあるが、文楽はまだまだ補助金頼みの面もある。ある日突然その額を削られたり、稀代の名手が理不尽な営業を強要され、体調を崩してしまったこともある。

顔を出して人形を操ることを、気になって集中できない、と心ない人が揶揄することもあった。見えているものを見えていないものとして、また見えていないものを見えているものとする、演出や約束事はいくつもある。それは初めて観劇する場合であっても難しいことではない。知っていればより楽しめるし、知らなくても素直な気持ちでそのまま見てくれればいいのだ。

とは言いつつ、文楽公演を見に行くという人は、どれだけいることだろう。文楽に限らず、古典芸能に触れる機会は、ごく限られている。それでも、自分が感じたように、昔の人たちも心動かされたのかもしれない。そう思うと、時代を超えて遠く何かがあったような気がす

るのだ。

あれから、いくつもの演目を覚えた。同じ死をテーマにしたものでも、静かに消え去りゆくもの、激しく燃え上がりながら終局を迎えるもの、様々だ。楽しくめでたい舞踊ものもあれば、子供たちが喜びそうな、かしらがお化けに早変わりする怪談のものもある。

その中でも、自分の心を捉えて離さないのは、名のある作品ではなく、人気の演目ではなく、かつて見たあの屋外での舞台あいさつなのだった。激しい動きをしたわけではない。人形遣いの腕の中に在っただけなのに、人形が人間に変わる瞬間を私は目にしたのだ。

いつか垣間見た、名人が紡ぐ繰り糸。絡め取られ、もはや身動きができない。ほどこうにも、その糸は目に見えない。このあたりにあるはずだ、と探りつつ、たぐり寄せている毎日なのだ。

いま思えば、あの幼なじみは「人形振り」を見せることで、文楽の「虚実の皮膜」を伝えようとしたのかもしれない。闇雲に、ただ人間の動きを写し取ろうと気負う自分に、虚と実、薄皮一枚のところを観客が求めるものがあるのだ。おそらく彼女なりのやり方で、そう教えて

くれたのだろう。

舞台は芸術ではなく芸能だ、とあいつは言った。多くの娯楽がひしめく現代で、時間とお金をかけて見に来てくれるお客さんを失ったとき、我々は滅びていくしかないのだろう。だが決して、そんなことにはならないと断言できる。連綿と続く、この繰り糸の技を失わない限り。

\*

「最前列に座っている美人、お前の知り合いなんだって？なあ、後で紹介してくれよ」

若手公演の舞台袖で、観客の入り具合を確かめていると、どこから聞きつけたものか、仲のいい先輩が、背後から近づいてきてそう言った。「はあ、まあ友達みたいなものですけど、あれは見た目と中身がだいぶ違いますよ」

これが同期の友人や後輩であれば、健闘を祈りつつそっとその場を離れるところなのだが、日頃お世話になっている先輩が、奴の毒牙にかかるのを、黙って見過ごすのはためらわれた。観客席からこちらの気配に気づいたのか、にっこり笑って手を振っている。先輩が物凄い勢いで手を振り返しているが、あれは間違いなく、



たかる相手を見つけた時の笑顔だ。

今回の若手公演では、初演当時の「曾根崎心中」に挑戦することになった。近松門左衛門が実際に起こった心中事件をもとに脚本を書き上げた頃は、「三人遣い」がまだ確立しておらず、一人の人形遣いが一体の人形を操っていたという。照明は今よりもずっと暗く、より「聞かせる」演出であつたらしい。

自分たちなりに当時のものに近づいてみよう、ということになり、私もこの日を楽しみにしていた。

ところがいざ始めてみると、どうも違和感がぬぐえない。見慣れた舞台と比べてしまうからなのか、何かしっくりこないのだった。やがてその違和感の正体に気が付くと、思わず吹き出しそうになった。

（そうか、お初が今ほど強くないからか）

江戸時代、庶民から熱狂的な支持を受けた「曾根崎心中」は、昭和に入ってから歌舞伎によって復活上演されるまで、長い間失われていた演目であった。

醤油屋の手代である徳兵衛と遊女お初は、将来を誓い合った仲だったが、徳兵衛が大切なお

金を友人に騙し取られ、二人は進退窮まってしまう。お初は徳兵衛を床下に匿いながら、客としてやってきたその友人を体よくあしらう。客に見えぬよう床下に足を伸ばし、徳兵衛と共に死のうと決意を促す。徳兵衛はその足首を喉に当て、お初の想いに答えるのだ。外へ抜け出す際、徳兵衛の手を引いて駆け出すのもお初、死に場所と定めた天神の森で、短刀を振り下ろすのを躊躇う徳兵衛に、早う早うとせがむのもお初だ。

文楽も、その影響を少なからず受けている。女人形の中で、唯一足のパーツを持つのがこのお初なのだ。現代において演じられていくうち、お初の気性がより強められていったのだろう。

観客席の最前列に陣取る幼なじみは、大きな目をうるませながら舞台に見入っている。子ども頃からよく見る、何かに夢中になっているときの目だ。離れていると、無性に懐かしく思いつ出す。

ああ、そうか。

天神さま、俺のお初が強烈すぎて、近松のお初が物足りなく感じてしまうのですが、一体どうしたらいいですか。

徳兵衛のように想いを遂げるか、馴染みの傾城に袖にされる悪人になるかは分からない。これからも会うたびに、いつもの気安さで、お互い罵り合いながら過ごしていくのだろう。それもまたいいじゃないか。あいつが飽きるまで付き合おう。

いつかこの身が、あだしが原の道の霜となるまで。

詩

# 詩

## 奨励賞 馬と満月

井川町 小林 康子

だれもいなくなったコースを  
再び走る

馳せ向かう先に見えたのは  
きっとあの青い満月

秋晴れの午後の競馬場

みごとに体軀が

時折のどよめきを切って走る

風をおこす

細い足を曲げ伸ばし大地を蹴る

たてがみが舞う

それぞれにつけられた

名前と番号をふり払い

走る

ゴール直前一頭がよろけ

腰が下がり騎手が落ちた

悲鳴があがる

追い越す馬への声援が沸く

裸の馬は前足を上げ

踏ん張り

立ち上がり

ゴールを過ぎて数メートル  
後足より崩れ

地面に腹をつけ

体が横になる

二度 三度

頭を上げ上半身を起こす

首をふり

腕うでを  
腕うでを

前を見る

風が止まり

足を投げだした

上半身の彫像は前を見ている

あれはもう終わりという

声が聞こえる

時が行方をなくし

今日という日の幕が引かれた夜

暗い空に満月

漆黒の中

青い満月

## 奨励賞 お引き取り願います

秋田市 谷 恵美子

夜の間

入り込んできたのだろうか

招かれざる客

激しくドアを叩き

恐しい警告のように

容赦なく乗り込んで来た

それは

自ら招き入れてしまった客

一方的だが

どこか悲しげで

無下にできないのは

心当たりがあるからか

知らぬ間に手離してしまった

大事な何かの代償に

小さな怠惰の蓄積が生み出した

痛み

これまで耐えてきた肉体が  
たまらず上げた悲鳴は

事の大きさを知るには充分だったが  
ひとつ決意をもって

告げなければならぬ

長くお相手はできません

失ったものを

取り戻す覚悟を決めたら

いつか告げなければならぬ

お引き取り願います と

## 奨励賞 ティールーム「陶」

秋田市 いしざと ゆうき

小洒落たブティックが

軒を連ねる 仲小路

とある陶器店の隣り

ティールーム「陶」

階段には 小休止のプランター

——二階へどうぞ

硝子張り 球体の洋灯ラランテ 藤の椅子ラタン

流行のカフェとは違う お店

昭和な あなたに ぴったり

窓際の 四人掛けの洋卓テイブルに

あなたと私 斜向かいに座って

顔を見合わせて 笑った

まるで 学生さんみたいね

なんだか 不思議

きれいな洋皿に載せられた

かるいシフォンケーキと

入れたての珈琲

硝子の器に盛られた

やわらかなチョコレート

あなたは私に 分けてくれた

あれから 随分語り合ったのに

掌を そっと 重ねることしか

できなかつた

思い出す度 泣けてくるの

私も あなたのことを

好きだったのかしら

青葉揺れる 仲小路

杜のティールームで

あの冬紡いだ 糸の片端が

まだ少し 心に残っている

入選 面影草

大仙市 鈴木 仁

明るい言葉に

いつも

助けられた。

震災のとき

電線が切れて、

まっ暗な町に

希望の明かりが点った。

それが旅館の明かりだと、

みんなを励ます灯だったと、

その人はすこし

涙ぐむ。

朝の光に

震える心を押さえつつ、

きれいな花だと

私は言った。

その人は  
山吹の花を持っていた。

食堂に飾るといふ

その数本の花の色に、

私は何か

救われたような気がした。

地震と津波に

傷ついた旅館は、

松川浦の

春の光の中に

立っている。

間借りしていた私は

外壁修理のために

何度も部屋を

移ったけれど、

その人の

# 入選 二百年分のねじれ

大館市 葉月 祐

私が生まれるずっと前から  
桂城公園の片隅に佇んでいた  
大きな傘のような木があった

シロヤナギという名の

この品種では

日本で二番目に大きな木は  
およそ二百年もの間

年輪を重ね続け

その身をねじらせながら

今日も 生きている

お前のねじれは歴史の一片を孕み  
お前のねじれは生命の姿形であり  
お前のねじれは声無き叫びとなる  
お前のねじれに 私達は振り返る

怒り 哀しみ 絶望

喜び 楽しみ 希望

戦争を生き抜き 二百年分の歴史が

シロヤナギのねじれには

刻まれているのだろうか

自分のねじれと向き合えない時  
人々はこの木の下に立つのだ  
枝葉の囁きに癒やされて  
迷いから救われたくて

シロヤナギのねじれに

秘められた 傷や痛みに

そっと寄り添うように

人々は 幹にふれる

互いのぬくもりを 重ね合うように

幼かった あの頃も

大人になった 今でも

シロヤナギを囲むベンチには

いつも誰かが腰かけて

空を眺めている

この木が生まれて

二百年以上経った今も

私達は 共に 今日を生きている

木と人 それぞれに

己のねじれと 向き合い続けて

今日を 明日を 未来を 生きていく

## 入選 たばこ

能代市 工藤 美咲

わたしもっと

もっとあなたを

わたしで満たしたかった

灰皿の中くたびれたわたし

すこしもあなたは見てくれない

ちぎんで

きえて

まがって

おれた

味わいつくしてさようなら

繰り返して味わって

すって

もいちど

はいて

すって

いまからあなたと火遊びを

箱入りのまだまっさらなわたし

指へからだをゆだねたわたし

そっとあなたは火をつけた

もえて

ほどけて

くずれて

おちる

それは案外単調だった

わたしにとっての特別は

あなたにとっては日常で

知らなかったの



# グリーン賞 飛べなくて

北秋田市 大森 開登

朽ちきつたのなら  
皆、「白骨化遺体」と私を呼ぶでしょう

飛んで 墜ちて うずくまって  
人間はひとり傷ついていきます  
たとえどんな名医でも  
貴女の心理の海溝までは  
手を伸ばせないでしょう

また人形が飛びました  
冷め切ったカップ一杯の烏龍茶  
飲み干したなら 墜ちるでしょう

ライト兄弟の像の横  
眠っているリリエンタール兄弟  
そして二宮忠八  
そして無数の紙飛行機たち  
そこで脱帽している私  
無言の 静寂の 邂逅 航行 埋葬

飛んで 墜ちて うずくまって  
人間はひとりで朽ちていきます

## グリーン賞 花

能代市 堀内和佐

花が散る

泡沫のごと消えるその美しさが

花の花たる所以とて

人はその花を忘れない

人が死ぬ

時間の波に抗えず

その花の記憶をもつ者は

予定調和に消え去ってしまう

実体を失い

誰も思い出さなくなつた

その花の

名前も

色も

香りも

もう二度と

蘇ることはない

けれども

そのことを

花は悲しみはしない

なぜなら

その花の咲いた軌跡は

決して消えはしないのだから

## グリーン賞 たとえば藍色

能代市 藤 田 茉 希

こくこく暗色になってもまだ  
きれいにそこに在り続ける  
見えませんか？

見ようとしなからですよ

藍色が好き

空の青さもいいけれど

やっぱり私は藍色が好きなのです

根拠がない、ありきたり。

そう思われる方もいらっしやいます

それでも精一杯

こころの声をあげましょう

たとえば藍色

Indigo blue

不思議な感じのこの響き

相変わらず

発音は想像の域を出ていません

でもやっぱり

藍色が好き

たとえば藍色

青藍、深縹、紺色と

私の毎日は紺色から  
だからあまり好きではないスカートも  
いつの間にかひらひら触ってる

藍色は私の色

ときどき皆の色をまねようとするけど

やっぱり私は藍色のままです

世界が藍色に染まったとき

私はどんなにか幸福でいられることでしょう

「皆違って皆良い」

それが私には

とても狂おしい

短  
歌

## 短歌

### 最優秀賞 竿 燈

秋田市 田 中 安

胎内に在りしころより染み付きし血潮が騒ぐ竿燈太鼓に  
 禁制の昔遙けし撥さばく乙女の白きかいな際立つ  
 巻く風に押されてせめぎ合う五本差し手の意地は互い引かざり  
 高下駄の見せ場作りし大若が莞爾と笑みてハイタツチする  
 根付くがに身じろぎもせぬ技讚えオエダサツサの掛け声が沸く  
 重心をびたりと据える小若の眼凜と光りて伝統継ぎゆく  
 神宿す竿燈祭り平成の御代越えいよよ途絶えざらまし

### 奨励賞 青 田

由利本荘市 佐 藤 榮 悦

見はるかす青田の中の道広くいつしか裡なる愁いを忘る  
 白鷺の青田の畦に降り立ちて塑像のごとく動くともなし  
 夕風の青田をわたりゆく先の一つ家に今明かりが灯る  
 満月の青田を照らし静寂はわが身じろぎをしばしゆるさず  
 病害を防ぐ作業のしるしなる三角の旗青田になびく  
 丈伸びし青田に時の満ちたりてかたち幼く稲穂は生るる  
 直ぐ立ちし稲穂わずかに頭を垂りて青田に淡く黄の色を刷く

### 奨励賞 春の面影

秋田市 石 田 幸 栄

身振り添へ語る口調のやはらかき光の春の手話講座見る  
 春まろぶ草を踏みつつゆく小径姿見えねどさへづり聴こゆ  
 竿竹屋路地行く速さアングンテなほ緩やかにゆく春の雲  
 桜ばな駆ける少女の肌のごとほのかな紅を帯びて麗し  
 青空を仰ぎゆく道風揺らす梢のあひより光こぼるる  
 雲晴れて空は明るし顔上げて風やはらかき道をわがゆく  
 草の上に光のまろぶ春の景降り立つ鳥の影もやはらか

### 奨励賞 さよなら、教室

秋田市 蓬 田 真 弓

教職の最後の年の幕上げる とんがり屋根の学び舎に「礼」  
 奥岳の残雪仰ぎ畦道をうららうららと春の探検  
 裏山の笹の葉ざわざわお化けの手 ものともしないプールの子らは  
 白鳥が斜めに過ぎる田園のパノラマシアター二階の教室  
 「今日の空、笑っているよ」早春の淡き青いろ子らは見上げる  
 歯磨き用ステンレスの流し場を洗い終えたら「さよなら、教室」  
 「本職を免ずる」僅か六文字に三十四年の教職終わる

## 入選 夕暮れの

由利本莊市 小田 敏

夕暮れの雨つらぬきて聞こえる北帰の雁の声のすがしき  
夕暮れの桜おぼろに見えながらさながらわれを異界に誘ふ  
天指してこぞりてゐしが木蓮の蕾は午後風の風にはころぶ  
サリサリと走る剃刀こちよく弥生の今朝の髭をそり終ふ  
下駄はきて夏を過ぎしわが足にやさしく残る鼻緒の跡は  
ほのぼのと咲きみし娑羅の花なれど散りて梅雨の土にまみるる  
夕映えの茜差しある川の面のひかりのかけら風が撒きゆく

## 入選 一滴の水

仙北市 大 山 文 穂

一滴も喉を通らぬ水恋ひて臥す夕暮を蝸の鳴く  
水飲めず薬も飲めず食取れず立つも歩むも意のままならず  
さまざまに工夫凝らせど今日もまた一滴の水も飲めず暮れたり  
七日がかりに喉を通りし水の味末期の水といふも諾ふ  
寝て含む水飲むことにも少し慣れ水の旨さを改めて知る  
栄養食品に味噌汁まじへ暫くは果敢なき老いのわが身養ふ  
喉なれば手術勧むる医師も云ふ高齢故のリスク高きを

## 入選 矜 持

由利本莊市 熊 谷 すが子

潮騒の遠く聞こゆる砂山に浜昼顔の地にひくく咲く  
夏の陽を力に変へて咲き盛る凌霄花の燃ゆるくれなる  
冴え冴えと花咲く白きそのあまき香は山百合の矜持と言はん  
あまたなる小花寄り合ふ紫陽花を孤独知らざる花かと思ふ  
駆け登るごとく咲き継ぐ立葵ためらひのなき白すがすがし  
向日葵の花ことごとく首垂れて立てるを見れば敗者のごとし  
朝顔の日々ひらく花数へるし亡母の慣ひわれが受け継ぐ

## 入選 「さくら」はセラピスト

秋田市 渡 部 栄 子

温かき汁がそのまま届けられる距離に娘等転居して来る  
家族四人その真ん中に柴犬のさくらが占めて一家成り立つ  
わが家は犬の保育所朝に来て夕べにさくらは帰り行く日日  
怖ず怖ずと犬に触れば怖ず怖ずと応えてくれる苦手な吾に  
連れに来る娘に飛びつき睦みあう撫でて転げて甘噛みしおり  
吾が言い分じっと聞く犬時に愚痴小声で語り心癒される  
温もりと慰め欲りて幾たびも犬小屋覗けば寄り来るさくら

入選 土木遺産・上郷温水路群

にかほ市 小川 勇

鳥海山の冷水を水田に取水して上郷の村々の稲作貧し

稲作の増収は温水灌漑かんがいと温水路築かん先人の知恵

昭和二年村を挙げての築造なり荒野拓きて事業興しき

水路幅ひろく水浅く段差つけ緩流かんりゅうを太陽の熱で温む

温水路群鳥越川をみなもとに五百町歩の稲田潤す

築造後米の収穫倍増し上郷の村々の悲願成りたり

日本初の我がふるさとの温水路群土木遺産に認定されぬ

俳  
句



# 俳句

最優秀賞 秋日和

五城目町 石井美智子

思ふとき頬杖の癖葉月かな  
八朔や米磨ぐ音のさはさはと  
部屋ごとに花の名前や秋簾  
窓辺まで蝗来てゐる峡の宿  
母連れて風浴びに行く秋日和  
白神に十二の湖や水澄めり  
母に汲む白神の水秋澄みぬ

奨励賞 あゝ日本海

秋田市 川尻弘子

有耶無耶の閑訪ぬれば露の臺  
傾きたる砂防林にも芽吹きかな  
玫瑰の途切れて青き日本海  
岩肌の羅漢にしぶき大西日  
夕焼や海を縁取る五能線  
土産屋の岬の風に春暖炉  
淡雪や佐渡の海越え恋の文

奨励賞 祈りの園

秋田市 舟山つぐみ

天水の流るる坂や草茂る  
大木に梯子掛けある墜栗花雨  
聖堂の引き戸重たし雨蛙  
落涙のマリアの足許百合の花  
風青しもろ手広ぐるマリア像  
十葉の十字のま白庭の隅  
夏蝶や草をはなれてミサの刻

奨励賞 西馬音内盆踊り

湯沢市 山田草人

踊りの輪繋がるまでの寄せ太鼓  
篝火に婀娜めく端縫ひ盆踊り  
母の後見真似に踊る少女かな  
月天心踊り埜塙となりし街  
哀愁の漂ふ踊り雁形かな  
しなやかに亡者踊りの夜の更くる  
笠取れば踊り子碧い眼の少女

入選 修験の杜

由利本荘市 佐々木成

宿坊の名残の村や桐の花  
透き渡る舞楽の笛や青葉杜  
舞楽舞ふ土の舞台や新樹光  
奥宮の護摩壇跡や木下闇  
千年の杉の走り根苔の花  
杜の古道たどる後先黒揚羽  
修験の滝とどろく溪の深さかな

入選 県境の里

由利本荘市 佐々木 豊

県境の嶺やまんさく咲き初むる  
渦巻く眼龍の如くの雪解川  
滝木壺弘法伝説誇る里  
番楽の獅子の猛りや豊の秋  
焼討の義民屋敷や懸巢鳴く  
冬構ダム湖に沈む村黙す  
解体の熊への呪文霊気満つ

入選 幻想・秋田城

秋田市 秋野 護

律令の北端の城青き踏む  
服はぬ狄もありなむ春疾風  
威を誇る瓦の築地風光る  
渤海のための厠舎か鳥雲に  
文も武も故郷偲ばむ朧月  
恋の和歌木簡にあり百千鳥  
遺跡みな天平ロマン山笑ふ

入選 秘境泥湯

湯沢市 加瀬谷 敏子

雪解けの真澄巡りし硫黄山  
すかんぼや小芥子ぼうこのおちよぼ口  
硫黄の香籠る霊山さみだるる  
大湯滝小湯滝絡み轟けり  
みんなに縛られてゐし一樹かな  
集落に新しき橋秋ざくら  
湯治場の千の水柱が留守を守る

入選 残照日録抄

―通所介護施設にて―

横手市 山崎 勝重

蛸焼を頬張る面の初笑  
ままならぬ脳トレ体操霏々と雪  
洞間声のカラオケひびき山笑ふ  
遠き日の節句を語り粽食む  
繰り返す話題途切るる酷暑かな  
秋うららこんなもんじゃと焼く漢  
つどひより元気たまはる年の暮

入選 城跡 浦城の彷徨

秋田市 宇月 よしを

槍先の揃ふや藤の帯郭おびしろわ  
堀深し本丸死守の谷空木たにうつぎ  
落城の兵の血飛沫山躑躅  
緑陰や丸に三の字の櫓幡やぐらのはた  
迎撃の渦猛々し雲の峰ただけ  
瀧涼し城主自刃の石標じしん いししるべ  
苔清水悼む磨崖の梵字かな

入選 花林檎

横手市 小國 弘二

父祖よりの林檎畑の深轍  
完熟と言ふ未来あり花林檎  
鉄音空へ突き抜け花林檎  
擦り傷のむず痒き朝花林檎  
雲掴む話聲高剪定す  
屈強の腕しなな剪定す  
剪定を逃れし小枝指で折る

入選 青の時間

秋田市 斗三木堂

菩提寺の時間は青く七変化  
北浦の朝染めゆく四葩かな  
潮騒とジャズに育ちし刺繍花  
紫陽花の丘にいやさか青弾む  
瓊花のブーケ快哉君の漁港  
紫陽花や泣く子の眼にも沁むる青  
美の国の青となりませ濃紫陽花

入選 夏

秋田市 渡部京子

太鼓打つ少女の額汗光る  
棒切れを振る子のをらず夏休  
大鉢の枝豆がでて本音でて  
暑き日の塩を利かせて一夜漬  
夏座敷鳥海山の風を入れ  
野良猫に嗅がれてゐたり三尺寝  
電工の腰の小道具日の盛り

入選 父

横手市 阿部清流子

亡き父の汗の滲みし作業帽  
父の日や父の形身の腕時計  
げんこつの痛さを偲ぶ孟蘭盆会  
父乗せて腰に疲れや茄子の馬  
父のなき庭の五葉や松手入れ  
父の忌や伽藍の灯消え底冷えす  
父遺す民具息づく蔵の春

入選 寒紅

秋田市 寺田秋悦

下駄の音二つ並んで星の恋  
湯上りの湯の香を包む宿浴衣  
引き寄せる赤いくちびる枝垂梅  
二人目がお腹の中に花便り  
ばつたんこトントンと叩く大宇宙  
蜘蛛の糸フツリと切れる我鬼忌かな  
灰になる母に寒紅みずあぶら

入選 地藏田遺跡

秋田市 土用三郎

椋鳥の群の降り立つ弥生村  
新涼や弥生遺跡にすべり台  
竪穴をいでたんぼの花に会う  
弥生人植えて食べしや栗青し  
花畑かとも弥生の墓の跡  
子の声の弥生遺跡に響く秋  
鳥海山は近し弥生の村の秋

入選 尊厳死

大潟村 田村陽子

尊厳死選択春の川速し  
暁を破りて急かす呼子鳥  
飛花落花緞帳下りる如逝けり  
母の魂ふわり浮遊の春の蝶  
納棺に添えるひと房八重桜  
聖五月棺の母は母乳色  
葉桜の薄闇鉦の音の澄めり

グリーン賞 想いは融けて

秋田市 鎌田 奈菜子

夏柑のごとく酸っぱし恋ひとつ

衣替え清らかなきみにおはようを

初蝉に負けじと紡ぐ愛のうた

夏帽子覗くうなじの白きかな

八寸を隔ててきみと夕涼み

溶けないでアイスクリーム僕の声

好きなんだ打上花火は散っていた



川

柳

# 川柳

最優秀賞 ミーアキャット

秋田市 小畑 寒 丈

明日を見るミーアキャットの立ち姿

その道の遠きが故に奮い立つ

白地図に順路書き込む花の位置

生涯の夢を担いで花は咲く

ふうふうと迂回路探す鼻づまり

ピバルディ四季が待ってる散歩道

次の世も愛の欠片を抱いてゆく

奨励賞 鬼ごっこ

秋田市 菅 原 浩 洋

真っ白い花に裏切りなどはない

誤作動もあるさおんなじ屋根の下

周波数違う二人の知恵比べ

花の陰 愛たしかめる鬼ごっこ

遮断機の前で吠えてる夜明け前

断捨離の下手なわたしにあるマグマ

土壇場で夢の階段踏み外す

奨励賞 運動会の思い出

大潟村 佐藤 豊

運動会家族の揃うおまつり日

日の出から父の張り切る杵のおと

新しい運動足袋が加速する

騎馬戦は丈夫でいつも馬にされ

車座を母のお重が取り仕切る

お呼ばれに先生の頬ほんのりと

其処此処に笑う家族の帰り道

奨励賞 斜交いの風

秋田市 伊藤 光 愁

後出しのじゃんけんぼんが得意技

間引き菜へ思い重ねる運・不運

居ごちが良いのだろうか枠の中

鈍色に染まってしまふ今日の鬱

欲ひとつ二者択一を迷わせる

斜交いの風に足元揺れている

泣きつくす驟雨過ぎれば青の空

入選 かすみ草

秋田市 三浦 千 両

爪淡く染めた日からの波の音

秘めやかな慕情が匂う指の先

恋しくて晶子に浸るみだれ髪

浮き沈みたとえは君のひと言で

花嵐ブライド支え撓む枝

新しいページへ風に誘われて

かすみ草君の隣で満ちていく

入選 生かされて

秋田市 石田 幸栄

打たれても明日へ弾む毬となる  
太陽と連れ添う歩み皆勤賞  
平凡を重ね非凡な明日となる  
口と足滑らぬように世を渡る  
人生は花だ茨も薔薇のうち  
許さない石を心にひとつ持つ  
生かされて花も茨も宝物

入選 大団円

五城目町 加藤 円心

見込まれた尻の軽さが波紋呼ぶ  
謙遜の腹を読まれた曲り角  
旗揚げの計算迷う夜の指  
花でいる疲れ時々立ち止まる  
磨り減った靴と嵌った成果主義  
生き下手の汗が陽を見た巡り合い  
大団円鬼も佛も良く笑い

入選 婦唱夫随

五城目町 佐藤 ちずる

主導権握ると歩幅狂いだす  
四十年付けた仮面はまだ脱げぬ  
溜め息の聞こえぬ程にあける距離  
虚も実も演じ続ける猿芝居  
接続詞みたいに夫がいる炬燵  
怪我しない位置でタクトを振っている  
婦唱夫随もう違和感も慣れました





エッセイ

# エッセイ

## 最優秀賞 すり鉢を悼む歌

由利本荘市 坂本愛子

知人から夏ワラビをもらった。鳥海山麓のその人の在所では、春のワラビは売り物、夏ワラビこそが垂涎の珍味なのだという。

教えられたとおり山椒味噌で、と山椒の実をすり鉢でつぶし始めた。冷凍の山椒の実は硬く、すり鉢の中を逃げ回る。つい力が入ったのだろう。すりこぎが空転した、と思ったら、大ぶりのすり鉢が真っ二つに割れた。

「すり鉢の底を突くな」と祖母に言われていたのに、「硬いものは出刃庖丁の背でつぶしてからすり鉢に」とも聞いていたのに、である。

山椒の強い芳香が立ち込める中、両手にすり鉢のかげらを捧げたまま、「ああ、いたましい」と久しぶりの秋田弁が口を突いて出た。

たかがすり鉢、ではある。

長い年月に目は減り、力が要る割りに粒やダ

マが残る。そのくせ、入り込んだゴマ粒などは、ササラで力まかせに掻き出すしかない。

だがわが家にとっては、ともに空襲をくぐり抜けた、唯一の戦争遺産なのである。

昭和十九年夏、南方戦線のサイパンやグアムが米軍の手に陥ち、日本は制空権を喪った。

年が改まるころには、偵察機が都市上空を跋扈し、「伝单」というビラを撒いていくようになった。空襲の予告とともに、国民の厭戦気分を煽るような文章が踊っている。「拾った者は厳罰」とされていたが、戦況が軍の発表のようにはかばかしくないことは、伝单を読まずともわかった。

東京郊外で小さな機械工場を経営していた祖父は、一家で郷里に疎開することに決めた。同郷の祖母が否というわけもない。急いで工場を部下に譲り、売れるものは売り払って現金に替え、秋田行きの手配を手配した。当座の着替えだけをリュックに詰めて、着の身着のまま横になり、翌日の出発を待った。

昭和二十年三月九日のことである。

のちに「東京大空襲」と呼ばれる惨禍により、

池袋駅で手荷物の積込みを待っていた衣類や家財道具すべてが焼失した。近くの小学校の運動場に逃れた一家は、プールの水をかぶって火の粉を避けながら、池袋駅が業火に包まれるのを見ていられなかったという。家族五人がそれぞれ背負ったリュックと、郷里までの切符だけが、一家の全財産となった。長い夜が明け、諦めきれない祖母が駅の瓦礫を掘り起こしたが、形をとどめているものはわずかにすり鉢ひとつだけだった。そんな重いものを、と祖父が止めたが祖母は聞き入れず、自分のリュックに押し込んだという。

焦土を後に、いつ、どのよう秋田に帰り着いたものか、家族の記憶はまちまちである。

空襲の翌々日の夕方には着いた、という者もあれば、一週間はかかった気がする、とも言っている。誰もが必死で、誰もが無我夢中だったのである。

ともあれ、大勢の疎開民とともに列車を乗り継ぎ乗り継ぎ、ようやく降り立った羽後本荘駅は、消え残った雪に半分埋もれていたと思われる。

祖父の郷里は駅から十kmあまり離れた山あいの村である。電報で迎えを頼むという手段も

なかったものか、一家は雪解のぬかるんだ道を歩き出した。五十歳前後の祖父母に二十二歳から十二歳までの三人の娘、その長女が私の母である。

町育ちの娘たちが悪路に難渋したことは、想像に難くない。半分も行かぬうちに末娘が道ばたにしゃがみ込んで動けなくなった。祖父がその子をおぶい、祖母が二人分のリュックを背負うことになった。祖母は自分のリュックのすり鉢を路傍の雪の中に埋めて目印に枯れ枝を立て、必ず取りに来るから、と宣言したという。

のちに、たかがすり鉢ひとつに、と笑い話にしていたが、祖母にとってそのすり鉢は、家財が焼失するのをただ見ているしかなかった悔しさの代償だったのであろう。

半分ほど行ったところで、牛にソリを引かせた農婦に呼び止められた。祖父母には懐かしい訛りで、「吉蔵さんのところの東京の親戚でねえか。農協でちょっと用を足して来るからここで待っていれ。送ってやるはんで」という。黒い細布を顔に巻いて目だけ出した「はんこたな」という装束や、「でたち」という粗末な野良着は、さぞ異様に映ったことであろう。あとでわかったことだが、中年と見えた農婦は、長女と

さして歳の違わぬ若妻であったという。

祖父の生家の小屋を仮住まいとし、荷を解くや否や、祖母は六kmの道を取って返し、無事にすり鉢を回収したという。雪が消えないかぎり、だれもそこにそんなものが埋まっていようとは思いませんでした。

風呂敷包みを片掛けに背負い、意気揚々と帰りを急ぐ祖母の姿が見えるような気がする。

割ってしまったすり鉢は、細かく砕いて庭木の根方に敷き詰めた。雨風にさらされ、日に灼かれて、いつかは土に還るのであろう。

スーパーで買った新しいすり鉢は、小ぶりで軽く、扱いやすい。目が立っているので、すりこぎを二、三度軽く回すだけで胡麻は香り立ち、白和えの豆腐はなめらかになる。遠雷と紛うような以前のすり鉢と違って、軽やかで愉しげな音がする。

それは、その使命を終えてやがては土に還るものを悼む歌に聞こえた。

突然に私は、秋田弁の「いたましい」が「もったいない」でも「惜しい」でもなく、取り返しのつかないものやことへの惜別の意味を込めた

「悼ましい」であることに思い至ったのである。

## 奨励賞 クニマスサマ

秋田市 鈴木 護

美しい娘辰子が、永遠の美と若さを求めて百日夜の願をかける。「北に湧く泉の水を飲めば願いが叶う」という観音様のお告げを得て深い山に入ると、泉に美しい岩魚がいた。獲って食べたところ、喉が渴いて渴いて、泉が涸れるほどに水を飲み続ける。突如、天地が割れるほどの雷鳴が轟き、滝のような雨が降り、山は崩れ、洪水は谷を埋め、満々と水を湛えた湖となる。気が付くと辰子は巨大な龍となり、湖の主となって湖底深くに沈む。

帰らぬ娘を案じる母は、龍となった娘に、戻れ戻れと絶叫するが叶わなかった。悲しみのあまりに松明の木の尻を湖に投げると、それが魚となって泳いでいったという。この魚が、田沢湖にしか生息しないキノシリマスである。

幼いころ添い寝の祖母から、しべ布団の中で何度も何度も聞いた話だから、筋は覚えている。祖母の「たっこオー、たっこオー」という、母が娘を呼ぶ声音と、湖に投げ込んだ松明が「キ

ノシリマス」という魚になった、というところが妙に心に残っている。

田沢湖クニマス未来館の展示室の入口にこの辰子姫伝説のパネルがある。記憶のキノシリマスは「木の尻鱒」であり、これがクニマスだった。

そのクニマスが田沢湖に帰ってきた。それも、かつて田沢湖から送られた発眼卵が孵化した子孫というではないか。とは言っても、湖畔にクニマス未来館が開館し、水槽に、山梨県の西湖から貸し出された五匹が展示されただけなのだから。

京都大学名誉教授の中坊徹次さんが、タレントでイラストレーターの東海大学の客員准教授「さかなクン」に、絶滅のクニマスのイラストを頼んだのが発見のきっかけだという。

さかなクンは、イラストの参考のため日本全国から近縁種のヒメマスを取り寄せたという。すると西湖からのものの中に黒い、クニマスに似た特徴を持ったものが見つかったというのだ。その後の研究や遺伝子分析からクニマスと断定されたという。絶滅したと思われる魚の生息が確認されたのだ。大発見である。

クニマス絶滅の経緯をたどると、文化、文政

の一八〇〇年代からの、玉川毒水との戦いの歴史につながっていた。

玉川温泉に発する強酸性の水を、どう薄め、稲作用水や飲料水に変えるか、という藩政時代からの幾多の取り組みがあったのだ。

先人達の努力により小規模の成功をみたこともあったが、稲作に適するだけの中和の効果が上がらなかったようだ。また、画期的中和施設の成功も、豪雨の洪水の影響で壊滅するなど、挫折を余儀なくされたのだ。

昭和の初めのころ、玉川の水を田沢湖に導入しての発電が計画されたそうだが、漁民の同意は得られなかった。しかし、大戦を目前にして電力需要の高まりや時代の要請からか、漁業交渉が成立。昭和一五年に玉川酸性水が田沢湖に導入されたという。ここにクニマスの絶滅の始まりがあったのだ。

水力発電の計画とともに、食糧増産を至上とする原野の水田化計画が、国策とし実施に移されてゆく。故郷の仙北平野には、戦後の食糧難時代に、引き揚げ者をはじめ多くの入植者が入り開墾に取り組んだという。

小学校三、四年のころには、すでに田沢疎水は通水していたようだが、当時のこととて人力

主体の開墾は遅々として進まなかったのだろう。農地ができてゆく姿は記憶にない。

仙北の奥羽山脈側は扇状地である。そのため広大な中央部分の水は地下を流れる伏流水で、川は水無川であり、農業用水は得にくかったのだ。また、扇状地だから、土地は大部分が岩石や砂礫である。入植して開墾したとしても、石との戦いで遅々として進まなかったに違いない。高学年から中学校のあたりは、田沢疎水は、村人に「大堰」と呼ばれていたと思う。先生にも親にも、コンクリートの岸で掴まるところのない、流れのはい、決して泳いではいけないところとだけ教えられていた。生家は山側にあったから、堰は三、四キロは下方にあった。だから、滔々と水の流れる大堰も、記憶としては薄い。高校を出て大学へ行き、家に帰ることも少なかったから、なおさらである。

職について二十五、六歳のことだったか。思い立って、現在の角館街道を自転車で家に帰ろうとして驚いた。かつて、高校へ通っていたころの道を通っているつもりが、景色が一変しているのではないか。道も幅の広い直線となり随分と違っている。

玉川橋を渡り、豊川へ近づくに従ってかつて

の林や原野はなく、奥羽山脈の麓まで一望できるではないか。整然と区画された水田が遙かまで続いているのだ。一枚の広大な板の上に、ところどころ屋敷林が点在している、という風景であった。今思うに、山側の第二田沢疎水が完成したころだったかもしれない。

ブルドーザーの出現が開墾を一変させたという。その威力が一挙に作業を進めて、大規模経営へのための耕地整理も行われたらしい。三千ヘクタール余の広大な稲作地帯に生まれ変わったのである。

先ごろ、クニマスの見学者が三万人を超えたことと、クニマスが死んだというニュースがあった。関係者の努力の成果と報われない残念さが同居しているような気がする。

クニマス館を訪ねてから、ずっと心にかかっていることがある。少年の目にも貧しかった故郷が、大規模な田園を有する米の一大生産地に変貌できたのは、クニマスの犠牲があつてこそという事実である。時代による作物の変遷はあろうが、今も農地の広大さは失われてはいない。大台山からの眺望は大曲の先まで見渡せる壮大さであった。

寡聞にして知らないが、クニマス神社、供養

塚等はあるのだろうか。あるならば訪ねたいと思う。なくても故郷の変貌への感謝をこめて、心の中に祀り「クニマスサマ(様)」と呼ぼうと思う。

## 奨励賞 私にできること

湯沢市 後 藤 千鶴子

夫と二人で家の草取りに行ったのは、今年五月の暑い日だった。夫は単身赴任先から帰ると時間を作り、私と一緒に増田へ連れて行ってくれた。

春は家の敷地一帯に伸びてしまった雑草を取り、冬には一回一回と雪おろしのために行く。病気がちで家にいることが多くなった私のために、外に出る理由を作って連れ出してくれたのだった。見ているだけでいいから一緒に行こうと言って。

六十を前にして頑張ってくれている夫に、私はなんの助けにもなっていないことが悔しくて申し訳なくて、その日は帽子をかぶり、首にタオルをかけ、手袋と飲み物を車に入れて湯沢市の家を出た。

そこは、私たち夫婦が家を出てから舅が一人で住んでいたところだ。平屋の小さな家は辺りの家にくらべるとずっと古く色あせていた。花もなく窓も閉まり、草の中に建つ家は緑色にか

こまれて明るく見えた。

衣類はきちんと整理する几帳面な舅は、子供が増えた私たちのためによく野菜を届けてくれた。同じ増田町内にある賃貸住宅まで自転車で乗り、ダンボール箱に大根、白菜といった買って帰るには重くなるものばかりを詰めて、お茶を飲みに来たと言って持ってくるのだった。孫たちをだっこするわけでもなくおもちゃを買ってくるわけでもなく。引越す時にも何も言わなかった。庭付きだったその住宅で、舅はミニトマトと小松菜を植えてくれた。収穫すれば家に届けに行つて様子を見てくる。こんなことから私が行つたり来たりするようになった。舅は買い物にも医者にも自転車で行く。雨が降ればバスを使い、十文字や横手までなら苦もなく出掛けて行く。

気ままに時々畑で野菜を作り花の鉢植えを買ってくる。玄関先を飾り窓を開け放ち風を入れる。食べたいものをきちんと作って食べご近所付き合いもこなす。離れた所からだけどずっと見てきた。

子供が三人になった機会に湯沢市に移り住み、増田へ舅の様子を見に通っていた。この頃夫の単身赴任は始まっていたから、月に一度必ず顔

を見に行き電話がくればすぐ行くようにしていた。明日は血圧の薬がなくなるから医者へ連れて行ってほしい。今日は腰が痛むから整形外科へ行きたい。今日は何で食べたらいいかかわらない。と、様々な理由の電話がくるようになった。やがて電話がこなくても毎日行った。仕事が終われば夜でも行つて様子を見てきた。家に行くといつも、舅の気に触らない程度に家事に手を出す。ここはずっと前から舅の家だった。至る所に舅なりの生活があると感じた。若い私にはやりきれない思いになる時があり、そんな時にはこの家の母のことを考えたものだ。

夫が結婚前に少しだけ話してくれたことがあった。母親が倒れたことを知つて家に行くの大勢の人がいて、中学生になったばかりの夫には理解できるまで時間がかかったと言っていた。鮮明に覚えているのは、いかの煮物が鍋に残っていたことらしい。夫は結婚してからもしばらくは、いかの煮物は食べなかった。淡淡と話す言葉とは別に、深い悲しみが伝わってきたことを覚えている。

初めて家に行った日、私の知らないこの家の母の記憶が使われなくなった鍋と共にほりをかぶりひっそりと台所に残っていた。静かな長

い時間に思われ二人には使えなくなったのだと  
感じたことを覚えている。

百歳に手が届きそうな大正生まれの舅は、今  
施設に入り私たちが会いに行くのを楽しみにし  
ている。家にいた頃は口数も少なく、ぶっ切ら  
棒な言葉や態度に難しい人というイメージだっ  
た。いくつかの入退院と手術の度に舅の手を握  
り励ましてきた。仕事をしてきた大きな手をし  
ていた。ありがとうの感謝の言葉もなかったが、  
面会に行くとき満面の笑みで会ってくれる。私に  
はそのことがとてもうれしい。

夫の代わりのようなことはできなかったけれ  
ど、私なりに舅への誠意は尽くしてきた。それ  
でも舅を一人にしまった罪悪感はないと思  
う。たとえ施設に入っていたとしても多くの  
人の力を借りて生活できていても、舅もまた  
家を出たという思いは持っているかもしれない。  
何が正しくて何がまちがっていたのだろう。少  
しずつ何かが変わる時には生まれる疑問なの  
かもしれない。

私たちは家族が年をとっていくことにまだ慣  
れていない。親でも子供たちでも、自分たちで  
さえ実感が薄いと思っている。私には何ができ  
るのだろう。目の前にある問題をひとつずつ取

り除きながら生きてゆくしかない。

初夏の日差しがまるで刺すほどに痛くて暑く  
て、言葉もなく私たち二人は草を取り続けた。  
ふっと風が抜けた気がして夫の背中を見ていた  
私は、まずはこの人に勇気を与え支え続ける人  
でありたいものだとなんとなく思っていた。こ  
の先もずっとと願いながら。



## 入選 まなざし

秋田市 藤村 美子

ある四月の午後、音のない雨が降り続いていて。一九八九年四月十六日と日付のある写真の中。白い傘がすっぽりと父娘をつつむ。八分咲きの、さくらの真下に。

「悪いところも似たもの親子なんだから」とは、いつもの母の叱言である。不器用で、気短な性分は、確かに父譲りであろう。

口喧嘩は、夫婦にとってのお愛想だった。父が晩酌を嗜む頃には目尻がゆるんで、好物の酒のさかなを少しずつ千疋鼓をうつのがきまりであった。

ある年の暮、馴染みの小料理屋で金婚式を祝った時の事。元来賑やかなうたげが好きな父は上さげんで胸元の手帳を取り出し、「武田節」を唄ってみせた。無骨な指先でタクトを振り乍ら響きのある太い声を絞り出した。それが終了の合図なのか、こぶしを挙げた。

数秒間は、その場の空気を圧した。

父の体を異変が襲ったのは、それから九箇月

後のことだった。胃がんだった。幸い大事には至らず、手術後のひと月ほどで退院した。

やれやれと安堵した。が、その年の十二月脳梗塞で私が倒れ、半年間の入院生活を余儀なくされた。翌年の初夏に退院したが、今度は母が盆の頃、救急搬送された。急性の心筋梗塞だった。集中治療室に丸五日間、生死の境をさまよって生還してくれた。

三人に痛みの角度が刺さる一年だった。

私が失意の底にある時は、その気持ちに寄り添って糸口を探ってくれた。どうしたら、両親にこの感謝の気持ちが届くのだろう。

時機は、丁度クリスマスころ。

そうだ！ ケーキを作ろう。とびっきりの逸品を。絶大な、左手一本での真剣勝負だ。

まずは卵。ボールを傾け空気を入れるように角が立つまで泡立てる。片手では至難だがここを避けては通れぬ門。発破をかける。

つぎは小麦粉。切るようにさっくりと混ぜ合わせる。私が試されている。香ばしく焼き上げるまでの五十分間は、仕上げるクリームを作成中。余念はないが、つい弾んでいる。

雪の降り積もった円い舞台上で全体像を視てい

るサンタさん。見守り番に八個の苓を従えて。ぶきっちゃんな出来栄えではあるけれど、どうぞお一つ召し上がれ。

父は直径十八cmの、四分の一を平らげたという。

その三日後、七十八年の生涯を閉じた。私が献上した最初で最期のケーキだった。

亡くなって八年後、父の雑記帳の存在を知った。中身はそっけなく中間色である。

ところが、読み進めると父のある領域が、立ちあがってくる。

がんの手術の際、仕事帰りに何度か見舞った。父の、あれほどちいさく見えた背中。

「矢張り、娘はいい」

この一言に、胸の奥がドキンとした。

私の症状経過を綴る頁には手が止まった。入院直後は、「ことばが少しわかるようだ」三か月後には「つかまり立ちをしてようやく歩けるようになってきた」とある。

「イライラしている。可哀想だ。代わってやりたい」とは…。

退院後の不安に吞まれて、ちぢこまった、あの日。泣きべそ色に下唇を噛み、突き上がった

くる感情をぶつけてしまった、あの日。

母の記述に至っては、几帳面な字面が所解読不能な文字に変転している。何としても生きてほしい……。その一念が天まで届き、天を動かしたというのだろうか。

安心の大きさが、まったく違う父の口角。

退職後、詩吟に親しんだ父は、愛吟集を懐に入れて常に持ち歩いていたらと聞いている。

武田信玄と配下の武士たちの出陣の様子を唄った「武田節」。「風林火山」の詩吟を含むその歌詞は、武田武士の心意気を窺わせる。

なかでも「人は石垣 人は城 情は味方 仇は敵」には、朱筆で棒線が引かれてある。

《人は財産である》という信玄公の生き様に心酔していたのであろう。父は母が退院した後の秋、吟詠界の総本山に赴き、短い旅をして一服している。

秋田市八橋の住宅地を流れる、草生津川。ソメイヨシノは今年もまた薄い桃色に花びらを広げて、両岸の遙か遠くまで咲き誇る。

「草生津川を歩く」と連日のように雑記帳に残す。面影橋までの遊歩道は、初冬の顔をして

いただろうに。一人歩いた父の心の沖。

五月、私はこの川べりの道をゆく。

端には、草の若緑とハルジオンの真白とがなだらかに揺れている。

繋いだ手をほどき、幼子を遊ばせる母親。歩幅を確かめ合って寄り添う年配の御夫婦。すれ違ふあわいを過ぎ去れば、美しい陰影に包まれて遠景となっていく。

ふいに、「妻子（つまこ）につつが あらざるや」という「武田節」の一節が、ふかい声で私の耳底に蘇った。

角張った父の真顔が、テレ臭そうな笑みを浮かべた。一瞬の虹を見せて草生津川の風景に溶け込んだ。

地上を往来する車の音をよそに、ながめの中にも、澱みのない水の動きがあるばかり。

ゆれる一群が、その水紋に映し出された。

それはまさに、萌える草の投影であった。水面に刻一刻と紡ぎ出されるいのちの輪郭。

見上げると、桜の大木から、まっすぐ空に伸びゆく枝葉たちが視界を彩った。わたしはある情感を覚えて、胸底を熱くした。

やがて、若葉と若葉の間合いから零れ落ちてくる、絶妙な真昼のひかり――。

ひろがる空の予感がした。

私は、今一度大きく息を吸った。

青葉をゆらす風は、そこまで来ている。

## 最優秀賞受賞のことば

### 感謝を込めて

短歌部門 田中 安

この度は、思いがけず立派な賞を授かり、たいへんうれしく、また光栄に存じます。

短歌は、三十代から自分なりに作ってみたりしておりましたが、五十歳になって、老後に続く趣味を持ちたいと教室に足を運び、取り組み始めました。まもなく古稀を迎える年齢となり、六十代の記念になればと思い、今回の応募を思い立ちました。

竿燈祭りは、秋田市中心部で生まれ育った私にとって、最も身近で心の躍るお祭りです。その竿燈をテーマに受賞の栄誉に与りましたことに、この上ない喜びを感じております。

これからも身のまわりの事柄を捉える眼を養うよう努めながら、短歌を生涯の友として歩んでいきたいと思えます。

末尾になりますが、長くご指導下さいました永田賢之助先生に深く感謝申し上げます。

### 峡の暮し

俳句部門 石井 美智子

こどものころ、訳もなく都会の生活に憧れた。自分はどこへでも行けると、根拠のない自信に満ちていた。

それから半世紀過ぎた今、生まれたところと同じ山間の小さな町で暮らしている。

先日、もんべをはいて庭仕事をしていたら郵便屋さんが来て「あきたびじょん」の大きな封筒を手渡ししてくれた。軍手を脱いで受け取ったそれは、俳句・「秋日和」の入賞の知らせだった。誠に有り難く、嬉しい出来事に心が躍った。年を重ねるごとに、母や亡き父への思いがあふれ、郷土への愛着が強まっていく。

自分をとりまく森羅万象を十七文字で表現する喜びを大事にしていきたい。

選をしてくださった先生の皆様に深謝を申し上げます。

### 受賞して思うこと

川柳部門 小畑 寒 丈

私の定年後の生き甲斐は川柳です。大病を二度（心筋梗塞・脳のくも膜下出血）しましたが、それを克服できたのは川柳でした。病床でも指を折って明日も生きると萎える心を奮い立たせました。その延長が今回の受賞に繋がったものと思うと感無量も一入です。

第二十回全日本川柳誌上大会で大会賞に輝いた句に「夢のあるドアを全開して生きる」（北海道樋川聖柳）がありますが、生きる方向を示している、私も余生は斯くありたいと心します。

拙句を選んでくれた選者の一人ひとりに、深甚なる謝意を表し、私の喜びの言葉とします。

## 二つのチカラ

エッセイ部門 坂本 愛子

所属する「本荘お母さん読書会」は、五十年余りの歴史をもつ女性だけの読書会です。毎月二冊の本を読み、語り合って千二百回になろうとしています。読み貯めた本が私の中で発酵して、思いもかけぬ受賞となりました。まさに「読書のチカラ」だと思います。

八月、母の末妹が亡くなりました。作中で悪路に行き暮れた叔母は、心も体も成長が止まってしまい、その半生を施設で過ごしましたが、年齢とともに記憶は鮮明になりました。折に触れ聞いた昔話の断片が、この作品の細部に生きています。過去にない猛暑に水さえ喉を通らなくなっ一週間、枕頭で胸の上下で呼吸を確かめながら書きました。

戦火にすべてを失った祖父母や母たちの無念が「見えないチカラ」となって、私に筆を執らせたような気がしています。

## 選評

### 小説・評論



安藤 巳智子

#### 選考に携わって

応募作は十二編。郷土の自然を感じさせる作品、生死に向き合った作品、専門的な知識を盛り込んだ作品など多彩で、いずれも意欲的であった。選考においては選者の押しどころがそれぞれに異なったが、結果的に安定して存在感を示した「露の臺」「棚頭の人形」の二作品が入選として選出された。以下、話題になったこと、感じたことなどを述べてみたい。

「露の臺」は、小作農の一家が田圃を手に入れた、力を合わせて事を成していく展開。江戸時代の生活や文化、農地や稲作の知識を折り込みながら、たくましく前向きに生きていく家族を

描いている。全て右肩上がりの成功譚は出来過ぎの感もあるが、田圃の状態を確認していく場面で見せる農民としての才覚や、親子の堅実な将来設計など、成功していく者のありように説得力がある。様々な文献を参考にしたエピソードも加えて、作品に厚みを持たせている。残念だったのは、表記や言葉遣いで気になるところが散見されたこと。よりきめ細かな配慮、推敲が必要だった。

「棚頭の人形」は、しっかりした構成で丁寧な練り上げられた文章であると感じた。文楽や歌舞伎、題名にもなっている法語などの知識を織り交せて芸能論的色合いも漂わせ、深みがある。主人公は、地元の小劇場で出会った文人に魅了され、その世界に深く関わっていく。印象に残ったのは、オープニングセレモニーや「曾根崎心中」での人形のしぐさ、たたずまいの描写。主人公の思いそのままに魅了される。より描き込んでほしかったのは、主人公に影響を与えていく人物たちとの関係。幼なじみの女性との距離感や微妙な心の揺れなど、会話の中にもっとにじませてよかったと感じた。

その他の作品についても触れておきたい。「大文字の見えるまちで」は、ふるさとで一

人暮らしをする老母に起きたアクシデントをめぐる話。日常目線で心に浮かぶままに綴っているような素材と文体で、すんなり共感できる。ただ、主人公と書き手とが混然として、むしろエッセイとしての要素が大きいのではないかとの印象につながった。「喪われた歌」は長きにわたる研究を踏まえた力作と思う。文章の勢いからして敢えて一気に書き上げたのかもしれないが、章立てなど一考の余地があるように感じた。「桜の木の下で君を待つ」は、人物設定や構成に工夫を凝らしたと察せられるが、かえって混乱を招く部分があった。仕上げに読み手の立場で読んでみることを勧めたい。

「にっこり吾平」は、知足がテーマで幸せについて素直に考えさせられる。但し言葉の選び方には配慮が求められる。「夢叶う日心孤独なイナカ者の妄想」は、エネルギーが感じられるだけに書きたいことの吟味と掘り下げをしてほしい。「オーロラ」は、後半ミステリアスな展開となり興味を引いた。そこを中心に膨らませてもよかった。「受験生活」は、ドラマチックな素材を扱うが、ノンフィクション的。人物の内面に切り込んでほしい。「海辺の中也」は、書き手の経験が色濃くにじむ。文末など表現の

不統一が気になった。「君への言葉、色づく想い」は繊細な若者の思いを描くが、焦点が曖昧。「オサルベさまとの約束」は情景の描写が面白い。淡々と交わされる会話にメリハリがほしかった。

読み手として興味深いことの一つに、作中の会話で何をどのように語らせているかということがある。たとえば方言を用いること。文字化することの難しさ、読み進む上での停滞感、地の文と会話文のニュアンスの乖離等々、気になる場合がある。その地に根ざした豊かな言葉であるだけに、作品の中で生かすには丁寧な扱いが大事なのではないかと思う。応募作の中にも方言を用いたものは少なくない。今後の創作に向けての話題提供としておきたい。



六 郷 博 志

### 安心して 読める作品

今回の応募作品数はほぼ平年並みの12作品。

応募者の年代は他の部門と違って10代から70代までが万遍なく分布しており、ジャンルもSF

から時代小説まで多彩だ。また、今回初めて応募された方が8人と半数を超えていることもこの小説・評論部門の大きな特色となっている。新たな挑戦をされた方々に敬意を込めながら、新鮮な気持ちでしっかりと読むことを心がけた。

しかし、いざ読み進めると難渋する作品がいくつかあった。その多くは読んでいるうちに話の辻褄が合わなくなったり、登場人物の様子が思い浮かばなかったり、内容が本当なのか疑わしくなったりして、あちらこちらを何度も読み返してしまおうといった作品だった。それはそれで楽しいのだが、自分の読み方が足りないのかと大いに不安になったことも事実だ。

一方で、順序にページを繰りながら安心して楽しく読み進めることのできる作品もあった。今回入選した「路の臺」と「柵頭の人形」は文章や筋立てがしっかりしていて安心して読める作品ということで選考委員が一致して推薦した作品である。

「柵頭の人形」は、文楽の魅力に取りつかれた「私」と、そのきっかけをつくった「幼なじみ」の物語。よく練れたテンポのよい文章で、特に人形の動きや舞台の様子の描写が見事だ。人形に引き込まれていく「私」にすぐに感情移

入ができるのは、きつとこの文章のリズムが人形芝居のリズムに重なった心地よさのせいなのだろう。そうであるだけに、物語の終末は未消化だった。「私」と「幼なじみ」を「お初徳兵衛」に重ねるためには、いくつものエピソードが必要であったように思う。今回は完結した作品を期待したい。

「路の臺」は秋田藩領内の小作、権兵衛一家が知恵と努力で財を成し富農となってゆく成功譚の時代小説。平明な文章で過度なレトリックがない。登場人物も実直で素朴。気持ちのよい人たちが着実に成功を積み重ねながら幸せを掴んでいく物語で、ゆったりとした気持ちで読み進めることができた作品である。ただ、都合のよい展開が多くみられてリアリティやドラマ性は欠けている部分があったのは残念だった。時代考証や歴史を踏まえながらよりドラマチックな時代小説になるよう挑戦していただきたい。

選外だったが、印象に残る作品を紹介したい。「オサルベさまとの約束」は、癌を宣告された「私」が子どもの頃に出会った山の神「オサルベさま」に再会しに旅に出るといふ童話仕立ての物語。溪谷の情景描写がとてもいい。きっと作者は川で泳いだことがあるに違いない。結末

にもう一工夫があれば、もっとすばらしい童話になっただろう。

「大文字の見えるまちで」は、都会で退職した「よう子さん」と郷里大館に住む母の物語。病気の母を何度も見舞う「よう子さん」が幼い頃の大館を思い出すエピソードがとてもよく書けている。飾らずに淡々と書く自分史の物語を、共感を持って読むことができた。

「にっこり吾平」は母と二人暮らしの人の好い吾平と、彼のよさを見つけて一緒に暮らそうと決意する志乃の心がていねいに描かれている。読んでいて温かい心持になる作品だ。物語に山場がなかったのが少し残念。クライマックスの設定を中心にプロットを再構成したい。

「オーロラ」は、北国の海辺の町に出現したオーロラに混乱する村人の様子を描く。子どもたちの会話やしぐさの描写がいい。そうした点では、後段のエピソードよりも、前段の海辺での野球を遊ぶ子どもたちの様子の方が生き生きとよく書けていたように思う。



## 選考を終えて

鈴木 祐 丞

まず総評であるが、「小説」あるいは「評論」として成立していないのではないかと感じさせる作品がやや目立った。小説に話を絞れば、自伝的要素を盛り込んだと思われる内容の作品が少なくなかったのだが、それらのほとんどが、「自伝」あるいは「エッセイ」としては成立しているが、「小説」という形に昇華されたものにはなっていないように思う。自伝的要素を盛り込んだ作品を「(私)小説」として成立させるためには、筆者は一度その自伝的要素を自分から引き離し、客観的な視点からそこに彫琢の手を加え、それを物語として再生させる必要があるのではないだろうか。

次に二つの入賞作品についての選評であるが、『路の臺』は全体がとてもきれいにまとまっている印象だ。重層的な複数のストーリーは手際よく操られ、それらの接着剤となる場面転換は不自然さを感じさせない。全体が確かな文章力によって支えられており、例えば「早くしない

と、雪を掴んでしまう」などの小粋な表現は見事である。欠点は、全体がきれいにまとまりすぎていることかもしれない。これという読みどころがなく、全体が単調に進んでいく印象で、時として退屈さを感じさせなくもない。例えば登場人物がもっと生き生きと、個性的に描かれていれば、より魅力的な作品になったかもしれない。『棚頭の人形』は、筆者の文楽への深い愛情をベースとし、繊細な感性と技巧的表現により、文楽の魅力を描き出すことに成功している。「だが今は、青白い照明に照らされて、その顔から薄い血管さえ見えてくるような気がした」などの表現は、読み手を引き込み、じつに素晴らしい。ただ、文楽の魅力を描き出すことには成功しているものの、その小説化に成功しているかと問われれば、首肯するのがやや難しくなる。全体的に話の展開が早く、読者からすると駆け足であちこち連れまわされる感があり、とくに結末部分は性急さを感じさせる。長編向きのテーマということなのかもしれない。



寺田和子

酷暑の夏を  
乗り越えて

五〇六連を推敲して一つの連にまとめてみてはどうだろうか。

奨励賞「ティールーム『陶』」

さらりと描かれていてシャンソンのような雰囲気のある詩。学生ほど若くはなかった頃の一場面を、時を経て同じティールームの席に座りながら思い出している。大人の恋の趣を伝えて終連が余韻を感じさせる。

入選「面影草」

詩の原型のような素直で優しい詩である。

作者は東日本大震災の被災者と思われる。震災詩というとかく声高な人の言葉が目立ちやすいが、この詩は優しく平易な言葉で抑え気味に思いを告げて心にしみ入る。山吹の花の色が明るくあたたかい。

入選「二百年分のねじれ」

「この品種では／日本で二番目に大きな」シロヤナギの木。樹齢二百年のねじれた木に呼びかける作者の脳裏には、江戸時代から明治へと移行する頃も含めた内外の戦乱も、そうした時代に生まれ死んでいった人々の姿もあろう。第六〇最終連にかけて、作者のシロヤナギの木に対する親愛の情と畏敬の念とが表現されている。

入選「たばこ」

「たばこ」になりきって書かれた詩には軽妙洒脱の感がある。「たばこ」を「わたし」「喫煙者」を「あなた」と設定することによって官能的な雰囲気漂わせる遊びどころ。

他に、現代社会批評的な詩として「ぼくは縄文人」「雀たちの中で」、林業経営に欠かせぬ間伐をテーマとした「問伐の詞」、初めて詩に挑戦したと思われる「誓い」「母の雑記帳」、楽しみながら書かれた「ポストまで」などが心に残る。思いを伝えるために本当に必要なもの（こと）は何か、じっくり考えて様々なテーマで書いてみてほしい。

グリーン賞「飛べなくて」

この詩は第三連によって生きたと思う。最後の二行については再考の余地があるのではないだろうか。

グリーン賞「花」

表記や文字の配列など視覚的效果まで細やかに考えて書いている。端正かつ静謐な詩。「予定調和に」を別の言葉で表現できたらと思う。

グリーン賞「たとえば藍色」

藍色が大好きな少女が精一杯「藍色」と心の

昨年は「あきたの文芸」が始まって五十年目という節目で五十二編もの応募があり、先行きが明るいと感じたが、今年は三十六編であった。振り返ってみると、七月からこちら大雨・地震・猛暑・台風による暴風雨、と災害が続いている。そのような中で皆様はよく気力を振り絞って書かれ、応募されたと思いつつ作品を拝読した。奨励賞は三編。傾向はそれぞれ異なるが、力量の面ではほぼ互角と受けとめた。

奨励賞「馬と満月」

目撃した一部始終が、馬の疾駆する勢いそのままに表現されていて、ぐんぐん引きつけられた。終連の失速が惜しい。

奨励賞「お引き取り願います」

「病氣」を「招かれざる客」としてたんと自身との決意を述べる。題を活かす意味でも第



声をあげる。終連に若さと一途さがみえる。

選を担当して三年目、今年も応募された皆様と詩を通して語り合うことができて幸せであった。詩を書くことは人生の支えとなると思っ  
ている。また皆様の新しい詩と出会える日を心待ちにしている。

詩誌「歷程」「密造者」同人。秋田県現代詩人協会会員。日本詩人クラブ会員。秋田市。



前田 勉

## 書き続ける 努力を

今年の応募作品数は三十六編。昨年に比べて十六編少なく、年代別では六十代以上が十八名と半数を占めた。十代から二十代の応募者数は八名で、昨年の十九名からすると大幅な減少である。

選考結果、最優秀賞は該当なし。奨励賞三編、入選三編、グリーン賞三編となった。

・奨励賞「馬と満月」

臨場感のある情景描写が効いている。第四連ではこの競走馬の運命を示唆し、「風が止まり／足を投げだした／上半身の彫像は前を見ている」と表現する。そして最終連ではそれまでの動から静の情景へと移行させる。全体に書きなれた筆致で表現力もある作品となっているが、最終連との結びつけに少し無理があるように感じた。

・奨励賞「お引き取り願います」

自ら招いてしまったこと。心当たりがあるから肯定せざるを得ない病。いつかは「お引き取り願います」と告げようと決意する。面白い表現の作品である。

・奨励賞「ティールーム「陶」」

大人の淡い情感が優しく伝わってくる。どこか切なく、それでいてどこかくすぐつたい。「昭和な あなたに ぴったり」なティールームの回想。

・入選「面影草」

面影草はヤマブキの異名。東日本大震災後の出来事を作品化している。短い作品ながら面影草を象徴的に描き、心情をくつきりと表わしている。「朝の光に／震える心を押さえつつ／き

れいな花だと／私は言った。」と言い終わるこの最終連の表現は、作者の気持ちが素直に伝わってきた。個人的には、作風からしても惹かれた作品の一つであった。

・入選「二百年分のねじれ」

大館桂城公園にある樹齢二百年の柳。太い幹の樹皮は左回りにねじれている。このねじれから歴史や長い時間の経過、心の変化を感じ取り作品化している。清新な感性が見える。

・入選「たばこ」

擬人化されたタバコの独白。視点を変えた取り組みが見える。やや単調な展開に終わってしまったようにも感じた。

・グリーン賞「飛べなくて」

飛行機のパイオニア達と「無数の紙飛行機たち」を列記し、そこで飛べない私が脱帽している。飛躍した展開と使いこなされていない語彙が妙に不思議に映る作品である。

・グリーン賞「花」

花の本質を問うかのように、「花が散」り「人が死」に「実体を失」うことを順序だてて表現している。少々観念的であることや、意図的な文字配列の効果が覚えてこなかったのは残念である。

・グリーン賞「例えば藍色」

「藍色は私の色」と言い切るほど「藍色が好き」という。さらに藍色には「青藍せいらん、深縹こみやな、紺色」(ルビは評者)と微妙な色合いによってその違いを表わす言葉があることを記す。小気味よいテンポで展開するこの作品は、自己の表出でもあり好感が持てた。

昨年もこの選評で記したが、詩はその年齢でなければ書けない世界というものがある。今現在をどう捉えどのように感性を高め詩作へと結びつけることができるのか。それは、詩を書き続けることしかない、そのように思っている。詩を書き続け個々の世界を見つけることができるよう願うとともに、次回も応募していただけることを楽しみにお待ちしております。

詩誌「密造者」、「海市」各同人。 泉現代詩人協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブ各会員。  
秋田市。



本  
当  
に

必要なもの

大八木 敦彦

他の選者の方々が書くことと重複するかもしれないが、詩の芥川賞とも言われる日氏賞を、

本年度は秋田出身の十田撓子さんが受賞なさった。十田さんの受賞詩集『銘度利加』のタイトル作である「銘度利加」は、「あきたの文芸」の一昨年度の奨励賞作品であり、同じ集中の「殞」はその前年の最優秀作品であった。十田さんが応募していた時期、私自身は選者ではなかったが、「当時の選者の方々にはだいたい鍛えられました」と十田さんは手紙に書いて寄せられた。「あきたの文芸」から今後、全国レベルの作家や詩人が生まれ出てくる期待を、十田さんは与えてくださったと思う。

また、今回の夏の高校野球は金足農業一色に染まった感がある。その興奮の余韻はいまだに日本中で続いている。日氏賞や甲子園の準優勝で、これまでどちらかといえど地味であった秋田県人の存在感が、今年は非常に高まったように思われる。

金足農業が快進撃を続けていた頃、私は郷里の福島に戻って、甲子園の熱戦をテレビで見ながら、実家の片づけに追われていた。春先まで老母が一人で住んでいた家が空き家になったので、家の処分のことを考え、中をきれいにしておかなければ、と思ったのである。

一週間かけて掃除をして、ごみ処理業者のトラックに三分の二のごみを捨てた。家の中にたまったもの・・・どの部屋にも畳の見えないくらい積み重ねられていた多くのものは、結局ほとんどが残す価値のない不要品で、ガラクたで、ごみの山だった。人生で本当に必要なもの、残しておかねばならぬものはどれほどもない、とつくづく感じた。

詩とは、本当に必要な言葉のみでつくるものである。みずからの命と引き換えにでも残しておかねばならぬ言葉を記したものである。そういう言葉にたどり着くのは確かに容易な技ではない。みずからの脳髓を切り刻み、内臓をえぐり取り、血液をすべて絞り出しても命に代わるような言葉は見つけられないかもしれない。けれども、それだけの覚悟がなければ、如何なる言葉も、あえて詩として書き残す価値はないということは真実である。

今回の応募作は、全体的に昨年に比べて切迫感が薄く、純度が低く思われ、最優秀賞を出すに至らなかった。以下、入賞した各作品について感想を記す。

#### 「馬と満月」

達者な筆致ながら、最終連の展開に無理があると感じられる。馬と満月を結び付けようという意図はタイトルからもうかがえるが、この悲劇の幕をどのように引くかを、もう一度考えていただければと思う。

#### 「お引き取り願います」

意表を突くタイトルから始まって、緊張感に満ちた一篇。象徴詩的な味わいがあり、読むたびにイメージが変化するような面白みを感じられる。

#### 「ティールーム「陶」」

素直な言葉づかいと銜いの無い作風で、じわりと味わい深い。この作品のように、誰にでもあるような経験を、だれもが使うような言葉で書いて、読む人の心にしみ込ませるのは、案外難しい。

#### 「面影草」

震災について書くのはある意味で非常に困難であり、危険でもあるのだが、気負いのない率

直な言葉を綴っている点で成功している。

#### 「二百年分のねじれ」

「ねじれ」という言葉自体が「生きている」ことを示している。そういう意味で、最後の十数行は不要であろう。

#### 「たばこ」

個人的には今回の応募作の中で最も優れていると思った。言葉の選び方、イメージの豊かさ、自在なリズム感。諧謔性の中にも、そこはかとない悲しみが漂っていて魅了された。

#### 「飛べなくて」「花」「たとえば藍色」

グリーン賞の三作は、テーマもそれぞれ、飛翔、花、色・・・で、若者らしい清新さと淡い感傷を感じさせる。言葉づかいや詩行の展開に物足りない部分はあるが、柔軟な感性を大切にして磨きをかけてほしい。

なお、選外とはなったが「ぼくは縄文人」と「ブードゥ」は印象的だった。どちらも原始的な世界をテーマにしており、太古の時代にまつわる生命の躍動感と神秘性に満ちている。

詩は本当に必要な言葉のみで書かれるもの、

と先に述べたが、それは、本当に「書くべきもの」を見つけて出すことであると同時に、上手く

まとめようとか、すぐれた作品にしようという意識を捨て去ることもある。むしろ逆に、自分のもっとも拙い部分、あるいは醜い部分をさらけ出そうと努めることで、欲や邪心が消え、自分にとって本当に必要なものが見えてくるのではないだろうか。

(秋田公立美術大学教授)

## 短歌



### 選歌寸評

佐々木 勉

出穂前後の青田の情景を作者ならではの感慨を込めて詠んでいる。どの歌も結句が良い。奨励賞 「春の面影」

・草の上に光のまるぶ春の景降り立つ鳥の影もやはらか

作者の視覚、聴覚でとらえた春讃歌の七首。

奨励賞 「さよなら、教室」

・白鳥が斜めに過ぎる田園のパノラマシアター  
二階の教室

三十四年間の教師の職を辞する作者の深い感懐。児童の目線で詠んだ歌は淡々として純真無垢である。

入選 「夕暮れの」

・夕暮れの雨つらぬきて聞こえる北帰の雁の  
声のすがしさ

・サリサリと走る剃刀こちよく弥生の今朝の  
髭をそり終ふ

私はこの作者の作品に注目した。恐らく歌歴の長い人なのだろう。何ら銜いのない歌柄であり、自らの感銘を七首に充分に詠み込んでいる。

入選 「一滴の水」

・一滴も喉を通らぬ水恋ひて臥す夕暮を蝸の鳴  
く

・七日がかりに喉を通りし水の味末期の水とい

ふも諾ふ

重病に臥している作者の一滴の水を欲する切実な気持が、ひしひしと伝わって来る。

実際に経験した者でなければ詠めない心情を必死の思いを込めて詠んだ七首である。

入選 「矜持」

・夏の陽を力に変へて咲き盛る凌霄花の燃ゆる  
くれなる

・冴え冴えと花咲く白きそのあまき香は山百合  
の矜持と言はん

七種類の夏の花を作者独自のとらえ方、表現の工夫で詠んでいる。特に七首のどの歌にも下句に作者の推敲の苦心が感じられる。

入選 「さくら」はセラピスト

・家族四人その真ん中に柴犬のさくらが占めて  
一家成り立つ

別居している娘夫婦の飼犬の名前が「さくら」。その「さくら」を作者夫妻に毎日預けて勤めに行くのだろう。犬を仲立にして別居の家族四人は救われている。まさに心を癒してくれる治療

士のセラピストだろう。ユニークな連作の七首。  
入選 「土木遺産・上郷温水路群」

・稲作の増収は温水灌漑と温水路築かん先人の  
知恵

最優秀賞 「竿燈」

・胎内に在りしころより染み付きし血潮が騒ぐ  
竿燈太鼓に

やや、大仰な表白の歌だが、それだけ竿燈に対する作者の思い入れが深い証なのだろう。

・高下駄の見せ場作りし大若が莞爾と笑みてハ  
イタッチする

・根付くがに身じろぎもせぬ技讃えオエダサッ  
サの掛け声が沸く

竿燈の躍動あふれる演技に魅了されている心情が率直にリアルに表現されている。

奨励賞 「青田」

・白鷺の青田の畦に降り立ちて塑像のごとく動  
くともなし

・病害を防ぐ作業のしるしなる三角の旗青田に  
なびく

昭和初期に郷土の温水路を拓くいきさつや難工事を完成させた業績を具体的に表現して七首に詠みあげている。

短歌誌「歩道」同人

歩道賞受賞

にかほ市広報歌壇選者

象潟町短歌会代表



加藤 隆 枝

### 選考を終えて

応募作を読ませていただきながら、今回は連作について考えさせられた。七首まとめでの応募というとき、やっと七首にするのではなく減らして七首にするくらいでないと、息切れした一連になってしまう。また、優れた一首一首を七首集めても七首にしかならないが、全体としての構成のよく考えられた一連は、七首以上の力を持ち、輝きを放つ。そんな一連を心がけた。

最優秀賞「竿燈」

題名通り竿燈を題材にした一連だが、観客としてというよりは、竿灯祭りと共に生きる人としての側から詠まれた作品のように感じられる。それだけ竿燈のことをよく知る具体的な描写が、力強く表現されている。的確で簡潔に、現在形で詠まれた一首一首は臨場感にあふれている。七首目だけはやや観念的で異質な気がしたが、この夏が平成最後の竿灯祭りであったことを思えば、これもまた作者の真率な思いであろうと肯われる。

奨励賞「青田」

「青田」と題する一連では、七首すべてに「青田」の語が詠み込まれている。これだけ同一素材を扱いながら、飽きさせることなく読ませるところに作者の力量を感じる。対象に寄り添い、対象をじっくりと見て詠まれた作品には、稲の生育と同様の時間が流れていることを感じさせる。

奨励賞「春の面影」

題名にびつたりの作品から成る一連。手話講座や竿竹屋などの素材を見事に生かして、春の光や雲の動きを表現している。やや気分に流れる感じの作品もあったが、やわらかな題名と相まってあまり気にならない。二首目で姿を見せ

なかった鳥が七首目では姿を現し、全体の構成もよく考えられている。

奨励賞「さよなら、教室」

長く教職にあった人の、最後の一年を詠み込んだ一連。早春の学び舎で迎えた新学期から再びの春に職を終えるまで、折節の景がスライドのように展開し、連作として楽しめる。子どもの言葉を生かした五首目や流し場を洗うという具体的な行為の詠み込まれた六首目が、退職ということを感じ深くしている。

入選「夕暮れの」

日常生活や目にする景物に触れて詠まれた作品はよくまとまり、調べも整っており、一首一首の完成度は高い。一連で見たとときに、作品の季節が前後する点がやや気になる。

入選「一滴の水」

何らかの疾患によって一滴も水が飲めないという悲惨な状況を克明に詠み込んで、まとまりのある一連。リスクの高い手術に踏み切れない自身の老いを直視していて、切ない。

入選「矜持」

どの一首にも花が登場し、その花の特徴が巧みに詠まれ、破綻なくまとまっている。一連としてはやや平板だが、七首目のように自身に引

きつけて詠んだ作品は共感を呼ぶ。

入選 『さくら』はセラピスト」

六首目のような助詞の省略された作品から、若干たどたどしさは感じられるが、自身の生活と思いに忠実な一連になっている。題名にふさわしい内容でよくまとまっている。

入選 「土木遺産・上郷温水路群」

上郷温水路群の歴史が、簡潔に力強く、迫力ある一連にまとまっている。七首目があることで、歴史にとどまらずに今へとつながる喜びが伝わってくる。

最後に、グリーン賞の対象作品である「午前一時」について。受賞には至らなかったが着想はおもしろく、結句は安易になりがちだが、歌い出しは魅力的。「特別に扱われた特別な何かを持たないわたしのままで」には、屈折した思いがよく出ている。

〔「短歌人」同人。現代歌人協会会員。日本歌人クラブ秋田県幹事。秋田県歌人懇話会常任理事〕

## 選考を終えて



菅原 恵子

最優秀賞 「竿燈」

・根付くがに身じろぎもせぬ技讚えオエダサツ  
サの掛け声が沸く

竿燈の演技の様子を具体的に表現し、祭りの気迫や躍動感に満ちた作品である。ことばの配りも丁寧で共感できる。

奨励賞 「青田」

・夕風の青田をわたりゆく先の一つ家に今明かりが灯る

実写をとおして作者の心情を格調高く表現。また、自然の前には驕らない作者の姿勢が伺える。

奨励賞 「春の面影」

・竿竹屋路地行く速さアンダンテなほ緩やかに  
ゆく春の雲

光も風も鳥影も柔らかな雰囲気包まれ、春の喜びが、視覚 聴覚をとおして表現されている。温かで繊細な感性を覚える。

奨励賞 「さよなら、教室」

・白鳥が斜めに過ぎる田園のパノラマシアター  
二階の教室

教職に永く就かれた方の作品。しみじみとした情感がにじみ出ている。七首とも感情を抑え明るくまとめている。

入選 「夕暮れの」

・サリサリと走る剃刀こちよく弥生の今朝の  
髭をそり終ふ

五感をとおして、ことば遊びにも気を配りつつ、夕暮れの描写を詩性豊かに表現。

入選 「一滴の水」

・喉なれば手術勧むる医師も云ふ高齢故のリス  
ク高きを

一滴の水も飲めない病氣と闘う日目の自分を凝視して表現され心打つ。

入選 「矜持」

・向日葵の花ことごとく首垂れて立てるを見れば  
敗者のごとし

花々をよく見ていて、特徴をとらえその思いを表現している。「題名」にも花を愛する作者の気持が入っている。

入選 「さくら」はセラピスト

・わが家は犬の保育所朝に来て夕べにさくらは

帰り行く日曰

今や猫や犬は家族の一員時代。犬の「さくら」を預かる中に生まれるユーモア、愛情に心あたたまる。

入選 「土木遺産・上郷温水路群」

・日本初の我がふるさとの温水路群土木遺産に認定されぬ

説明的、観念的になり易い題材であるが、精一杯「詩としての昇華」を目指す姿勢に共感。

※他に心に残った作品

「杉の間伐」

・間伐の担い手もなく金もなく伐らずに荒るる杉山あまた

「代々木の杜へ」

・春を祝ぐ社の大祭に招かれてかしくみ参らず代々木の杜へ

「金農ナイン」

・100回の記念大会の甲子園準優勝飾る金農ナイン

※今回はグリーン賞該当者ナシだが、「午前一時」に心ひかれた。

若い人らしい作品群から、作者の思いが手にとるように伝わってきて、捨てがたかった。

・どうしたのかとどうしたらいいのかは大抵

違う さあどうしよう？

・特別に扱われたい特別な何かを持たないわたしのままで

自分を見つめて素直すぎる一連は、危うげな繊細な感性から生まれる抒情である。今後が楽しみな作者である。

・「かりん」同人・「かりん秋田の会」代表

・あきたさがけ読者文芸(短歌)選者

・現代歌人協会会員

・日本歌人クラブ秋田県幹事

## 俳句



熊谷 尚

### 季語を活かす

わずか十七音という短い詩型の俳句を介して作者と読者が一つに繋がることができるとは、季語によって共通のイメージを結び合うことができるからにはかならない。季語をどう活かすか。そこに句作の要諦がある。

最優秀賞「秋日和」

八朔や米磨ぐ音のさはさはと

部屋ごとに花の名前や秋簾

母連れて風呂浴びに行く秋日和

一句目。「八朔」には、出穂期に吹く強風の意味もある。「さはさは」という擬音のどこか冷やかな感じとの取り合わせが見事。

二句目。部屋の名前は秋の七草だろうか。

「秋簾」が置かれたことで、端正な旅館の一室が映像として立ち上がってくる。

奨励賞「あゝ日本海」

玫瑰の途切れて青き日本海

岩肌の羅漢にしぶき大西日

夕焼や海を縁取る五能線

一句目。「途切れて」の措辞により、ぱっと眼前に広がった日本海の景の大きさが強調されている。赤と青の対比が鮮やか。

奨励賞「祈りの園」

大木に梯子掛けある墜栗花雨

聖堂の引き戸重たし雨蛙

風青しもろ手広ぐるマリア像

梅雨どきを詠った句から一転、三句目は「風青し」と詠う。季語が物語るのは、聖母マリアの無限の愛と秘めた強さである。

奨励賞「西馬音内盆踊り」

踊りの輪繋がるまでの寄せ太鼓

しなやかに亡者踊りの夜の更くる

笠取れば踊り子碧い眼の少女

一句目。少人数で踊り始め、徐々に踊り手が

増えていくのがこの盆踊りのある種の様式なの

だそうだ。臨場感溢れる一句である。

入選「修験の杜」

宿坊の名残の村や桐の花

由緒正しき宿坊を彷彿とさせる「桐の花」。

入選「県境の里」

番楽の獅子の猛りや豊の秋

重要無形民俗文化財の宝庫、秋田ならではの。

入選「残照日録抄―通所介護施設にて―」

つどひより元氣たまはる年の暮

来る新年がさらに良い年になりそうな予感。

入選「幻想・秋田城」

服はぬ狄もあひなむ春疾風

「春疾風」が蝦夷征討の軍勢の姿に重なる。

入選「城跡 浦城の彷徨」

落城の兵の血飛沫山躑躅

古戦場に自生する山躑躅の血のごとき朱。

入選「秘境泥湯」

湯治場の千の水柱が留守を守る

擬人化により水柱に焦点を当てる手法。

入選「花林檎」

鉄音空へ突き抜け花林檎

突き抜けるような青空に花林檎が映える。

入選「青の時間」

美の国の青となりませ濃紫陽花

男鹿の新名所、雲昌寺を巡る贅沢な時間。

入選「寒紅」

二人目がお腹の中に花便り

「花便り」とともに舞い込む嬉しい知らせ。

入選「夏」

電工の腰の小道具日の盛り

暑い盛りを精力的に働く人の気っ風の良さ。

入選「地蔵田遺跡」

新涼や弥生遺跡にすべり台

今に息づく遺跡跡地に子らの声が響き渡る。

入選「父」

父の日や父の形見の腕時計

形見の腕時計に父の温もりを感じるひと曰。

入選「尊厳死」

飛花落花緞帳下りる如逝けり

惜別の桜。見事な人生の幕引きである。

グリーン賞「想いは融けて」

夏帽子覗くうなじの白きかな

うなじから溢れる眩しいばかりの若さ。

「狩」同人 公益社団法人俳人協会会員



感慨は深く、表現は単純・平明に

岩谷塵外

標題の言葉は、高浜虚子が「俳句への道」

(岩波書店版)の中で「俳句の目指すべき方向」

として示したものである。

このことを念頭に置いて選に当たった。

最優秀賞「秋日和」

八朔や米磨ぐ音のさはさはと

部屋ごとに花の名前や秋簾

白神に十二の湖や水澄めり

骨法が確かで、切字「や」が奏功し余情を生み出している。

奨励賞「あゝ日本海」

傾きたる砂防林にも芽吹きかな

玫瑰の途切れて青き日本海

夕焼や海を縁取る五能線

銜いの無い素直な表現に好感が持てる。

奨励賞「祈りの園」



聖堂の引き戸重たし雨蛙

風青しもろ手広ぐるマリア像

夏蝶や草をはなれてミサの刻

難しい句材が情感豊かに纏められている。

奨励賞「西馬音内盆踊り」

踊りの輪繋がるまでの寄せ太鼓

篝火に婀娜めく端縫ひ盆踊り

笠取れば踊り子碧い眼の少女

盆踊りの様子が丁寧に活写されている。

入選「修験の杜」

修験の滝とどろく溪の深さかな

修験の杜の奥深さが伝わってくる。

入選「県境の里」

焼討の義民屋敷や懸巢鳴く

郷土への愛情と誇りが感じられる。

入選「残照日録抄―通所介護施設にて―」

ままならぬ脳トレ体操霏々と雪

ともすれば暗くなる句材を、ユーモアを交えて明るく詠まれており感銘した。

入選「幻想・秋田城」

文も武も故郷偲ばむ朧月

重厚な句柄と的確な表現に惹かれた。

入選「城跡 浦城の彷徨」

緑陰や丸に三の字の櫓幡

季題の幹旋が奏功している。

入選「秘境泥湯」

湯治場の千の水柱が留守を守る

掲句の「千の水柱が留守を守る」の措辞がい

かにも「秘境」らしい発見である。

入選「花林檎」

屈強の腕しなしなと剪定す

林檎農家の仕事ぶりや心情が的確に捉えられ

ている。林檎への愛情が感じられる。

入選「青の時間」

紫陽花や泣く子の眼にも沁むる青

紫陽花の多様な呼び方を巧みに使い熟してお

り感心した。

入選「寒紅」

蜘蛛の糸フツリと切れる我鬼忌かな

日常生活の悲喜や感慨を切り取った作品が共

感を呼ぶ。

入選「夏」

野良猫に嗅がれてゐたり三尺寝

それぞれの句の着眼点が斬新である。

入選「地藏田遺跡」

新涼や弥生遺跡にすべり台

平明・的確な表現に惹かれた。

入選「父」

父乗せて腰に疲れや茄子の馬

亡き父に対する愛惜の情が胸を打つ。

入選「尊厳死」

納棺に添えるひと房八重桜

重い題材であるが、季題の幹旋により極楽往

生が想起される作品に仕上がっている。

グリーン賞「想いは融けて」

初蟬に負けじと紡ぐ愛のうた

夏帽子覗くうなじの白きかな

八寸を隔ててきみと夕涼み

どの句にも青春を謳歌していることが滲み出

ている。季題の選択が適切で感心した。「継続

は力」である。更なる研鑽と活躍を期待する。

秋田県俳句懇話会会長・日本伝統俳句協会東

北支部事務局長・ホトトギス東北支部同人会会

長・公益社団法人俳人協会会員・「ホトトギス」

同人・「百鳥」同人



## 個性の

## 発露として

和田 仁

しながら日本海のパノラマを快走活写。視点の転換も巧み。情景と季語の幹旋・配合に無理なく、時に飛躍も織り交ぜ、力強さの中に安堵の配慮もなされ詩情を柔軟に描出。

入選「残照日録抄―通所介護施設にて―」  
・ 蛸焼を頬張る面の初笑  
 煩惱を笑いの世界へ導く。作句技量も卓越。  
入選「幻想・秋田城」  
・ 服はぬ狄もあらぬ春疾風  
 過去現在に跨る世界をリアルに描出。

清澄にして多様多感な詩性を存分に堪能。詩

的感動、個性の発露の一形式として俳句作品に

触れ、その感性また精神の彩り・有様を大いに

学ぶ機会を得た。モダンイズムのトレンドも垣間

見られた。

最優秀賞「秋日和」

・ 八朔や米磨ぐ音のさはさはと

・ 部屋ごと花の名前や秋簾

・ 窓辺まで蝗来てゐる峽の宿

・ 母に汲む白神の水秋澄みぬ

抑制の効いたメロディアスでさえある詩的な

響きが心地良い。全篇、ぶれること無く情感を

醸すヒュウマンでさり気ない作風が魅力。常に

他者に寄り添える人間力をもって、一連を平明

かつ自在に表出。

奨励賞「あゝ日本海」

・ 有耶無耶の閑訪ぬれば露の臺

・ 玫瑰の途切れて青き日本海

・ 岩肌の羅漢にしぶき大西日

・ 聖堂の引き戸重たし雨蛙  
・ 風青しもろ手広ぐるマリア像  
・ 夏蝶や草をはなれてミサの刻  
 しなやかな荘厳さと共に仄かなエロティズム  
 を感受。一途に重くならず、さらりと俳味も交え  
 た外連味の無い清廉な矜持に共感。

奨励賞「西馬音内盆踊り」

・ 踊りの輪繋がるまでの寄せ太鼓

・ 篝火に婀娜めく端縫ひ盆踊り

・ 笠取れば踊り子碧い眼の少女

練達の技の一連が、読み手を艶やかな幻想の

世界に導く。破綻の無い多様な視点、多彩な言

回しで見事に充実の七句に昇華。

入選「修験の杜」

・ 奥宮の護摩壇跡や木下闇

・ 幽玄の世界の手触りを的確に描写。

入選「県境の里」

・ 番楽の獅子の猛りや豊の秋

風土独自の美学も取込み、格調ある作品。

・ 槍先の揃ふや藤の帯郭  
 栄枯盛衰の世界を閑寂、ときに華麗に活写。  
入選「秘境泥湯」  
・ すかんぼや小芥子ぼうこのおちよぼ口  
 テーマを逆手にとったユーモアが秀逸。

入選「花林檎」

・ 剪定を逃れし小枝指で折る

・ 一連で暗に一農のパラダイムを提示か。

入選「青の時間」

・ 潮騒とジャズに育ちし刺繍花  
 守旧の骨法にとられず闊達。

入選「寒紅」

・ 湯上りの湯の香を包む宿浴衣

入選「夏」

・ 大鉢の枝豆がでて本音でて

入選「地蔵田遺跡」

・ 子の声の弥生遺跡に響く秋

・ 子

・ 子

・ 子

入選「父」

・げんこつの痛さを偲ぶ孟蘭盆会  
入選「尊厳死」

・暁を破りて急かす呼子鳥

グリーン賞「想いは融けて」

・初蟬に負けじと紡ぐ愛のうた

冒険もあり清新。次なる躍動に期待。

秋田県国際俳句協会会長

国際俳句交流協会会員

天為同人

## 川柳



### 推敲の大事さ

藤 咲 子

今年の応募作品は、昨年より十二編少ない四七編でしたが、まあまあ例年と同じくらいのかなと思っっています。

丁度三年、選をさせていただきますので今

年で選者は終わりますが、去年と同じく最初に確認したことは誤字脱字、そして助詞の使い方などをキチンとみて、はっきりダメな作品は採らないようにと、これは三人の選者の一致した意見でした。また誤字があっても本人に確認してという事もあるらしいですが、作品を推敲する事によって未然に防ぐことができると思うので

作句の時にきちんと取り組むべきだと思います。最優秀賞「ミーアキャット」

・その道の遠きが故に奮い立つ

・生涯の夢を担いで花は咲く

・ふうふうと迂回路探す鼻づまり

・ふうふうと迂回路探す鼻づまり

・ふうふうと迂回路探す鼻づまり

・ふうふうと迂回路探す鼻づまり

題がおもしろくふっとひきつけられました。未来への明るさがよく出て生き生きとした句を感じましたが、鼻づまりが何故なのか気になりました。ベテランの詠みと思います。

奨励賞「鬼ごっこ」

・周波数違う二人の知恵比べ

・花の陰 愛たしかめる鬼ごっこ

・誤作動もあるさおんなじ屋根の下

まず題でウキウキしました。使い古した言葉もありましたがストーリーを並べかえると、また違った感じになるように思いました。三人共点

数が入りました。

奨励賞「運動会の想い出」

・日の出から父の張り切る杵のおと

・新しい運動足袋が加速する

・車座を母のお重が取り仕切る

運動会という家族の輪があちこちに詠まれ、小さい頃の思い出がよみがえります。

奨励賞「斜交いの風」

・鈍色に染まってしまふ今日の鬱

・欲ひとつ二者択一を迷わせる

・斜交いの風に足元揺れている

斜交いにと普通は多く使われているが、斜交いのとなっていて、少し迷いました。また「る止め」が並んでいるので入れかえたらざっと良くなると思います。一行一行よくまとまっていますので、これからを期待します。

入選「かすみ草」

・秘めやかな慕情が匂う指の先

・浮き沈みたとえば君のひと言葉

全体にはまとまっていますが題をもう少し考えたならグッとよくなるように感じました。

入選「生かされて」

このストーリーも全体にまとまりがあり、女性らしく人間模様を詠んでいます。使い古された言葉が多いように思いますが、ベテランの句の

ような気がします。

入選「婦唱夫随」

・溜め息の聞こえぬ程にあける距離

・接統詞みたいに夫がいる炬燵

夫婦間が一連の物語風になっていて、目標がはっきりと感じられベテランの作品と思いました。

今の世の中、夫と奥さんの立場が逆になり、女性強しがあらわれておもしろいです。

入選「大団円」

・謙遜の腹を読まれた曲り角

・花でいる疲れ時々立ち止まる

題が題だけに、もう少し思いきった言葉があってもいいのかなと感じました。そして句には無限の可能性があるんだと勉強させられました。またいつかお会いできますことを楽しみにしております。



## 標題との整合性

小松 隆 義

改めて言うまでもなく川柳は人間諷詠の文芸であるから、作品は陰に陽にあるいは直接・間

接を問わず必ず人間が存在し、人間の息吹きを感じられなければなりません。その欠けている句が散見されました。

また単なる状況の説明や報告に終わっている句は文芸性において評価が低くなります。いつもながら誤字や漢字の誤用、不必要な一字空けも目につきました。また中七や座五の字あまりは句姿を損ねるばかりでなくリズム感に乏しくなるので避けたいものです。

更に当企画においては句群と標題との整合性も審査の対象となることを念頭において選考に当りました。

以上の留意点を踏まえて、応募いただいた47作品の力作から選者三人が事前審査で独自に抽出した上位作品を主体に慎重かつ厳正に審議を重ねた結果、入賞作品は次の通りと決まりました。

最優秀賞「ミリアキヤット」

・明日を見るミリアキヤットの立ち姿

・白地図に順路書き込む花の位置

・ビバルディ四季が待ってる散歩道

一般的にはあまり馴染みのない動物を擬人化して未来を展望する人間の姿を標榜した意外性が巧み。白地図に書き込む順路とその散歩道で

見た四季の移ろいをビバルディの名曲を引用して表現。ベテラン作家だと想像するが、五句目の座五の俗っぽさで句群全体のイメージが崩れたことは惜しまれる。

奨励賞「鬼ごっこ」

・誤作動もあるさおんなじ屋根の下

・周波数違う二人の知恵比べ

夫婦間の小さな蹉跌とその修復への努力を詠んだ。比喩による誤作動と周波数の措辞は絶妙。

奨励賞「運動会の想い出」

・日の出から父の張り切る杵のおと

・車座を母のお重が取り仕切る

単なる餅搗きの情景と取られそうな句だが標題が効いて理解できる。句群から運動会を楽しむ家庭の雰囲気満喫できる。題と内容がマッチしているが、標題の「の想い出」は省略した方がベターであろう。

奨励賞「斜交いの風」

・後出しのじゃんけんぼんが得意技

・鈍色に染まってしまふ今日の鬱

後出しのじゃんけんは癖になっては困るがそれは百も承知で自分を卑下している。句群のバラバラ感否めないもので均一性が欲しい。入選「かすみ草」

・かすみ草君の隣で満ちていく  
女流作家の作と直感できる情念句。かすみ草は自身のこと。この句群に対して標題は少々俗で安易すぎはしないか。

入選「生かされて」

・打たれても明日へ弾む毬となる

打たれ強く生きるには強靱な精神力が要る。

前向きな作者へ拍手。

入選「婦唱夫随」

・接統詞みたいに夫がいる炬燵

接統詞のような夫。敢えて婦唱夫随とした標

題と併せて夫婦の力関係が垣間見える。当事者

同士が良ければそれで好し。ごちそうさま。

入選「大団円」

・生き下手の汗が陽を見た巡り合い

句群と標題が必ずしもマッチしないが、大団円

だけに終わり良ければすべてよし。

(秋田県川柳懇話会副会長 川柳ウイング代表)



## 殻からの脱却を！

長谷川 酔 月

「あきたの文芸」は、七句を一編とした作品の中に、自分の思いを十分に投影する場であるのみならず、作者の力量の見せ場でもあると思っている。

そのためには、世の中の事象をしつかりと目と心で感じ取り、一編の中に適切に配置して、鑑賞者の共感を得ることが大切である。

今回の応募では、比喩やボエムの入った作品は少かったが、時にはこうした分野にも果敢に挑戦して欲しいとの思いでいる。

以前にも触れているが、この度も過去の入選パターンを念頭に入れたような作品が多く見られたが、困難ではあろうが従来の殻から脱却した作品であって欲しいと願っている。

また、文芸作品として品格を保つためにも、誤字脱字はあってはならず、また禁止用語や類想句、暗合句等には十分に留意することは論をまたないところである。

こうした中で、今回上位に入った作品ははず

れも、新鮮さが感じられ新風を注いでくれたように思う。

最優秀賞 ミーアキャット

・明日を見るミーアキャットの立ち姿

・白地図に順路書き込む花の位置

・ビバルディ四季が待ってる散歩道

・次の世も愛の欠片を抱いてゆく

部分的に固い感じの作品もあるが、愛嬌ある

ミーアキャットを題材にこれをカバーするなど

工夫がみられる。老境を詠んでいるようだが、

前向きに生きんとする姿勢に共感。

奨励賞 鬼ごっこ

・真っ白い花に裏切りなどはない

・誤作動もあるさおんなじ屋根の下

・花の陰 愛たしかめる鬼ごっこ

具象と抽象が綯い交ぜになった作風がいい雰囲気醸し出しており、新鮮な切り口の作品群が心地よい。一句一句が説得力をもって迫ってくる。ただ七句目は一考を要したい。

奨励賞 運動会の想い出

・日の出から父の張り切る杵のおと

・車座を母のお重が取り仕切る

・其処此処に笑う家族の帰り道

運動会の楽しい雰囲気伝わってくる。典型

的な具象句であり、特に派手さはないがアットホームな作風で、全体的に安定感がある。

奨励賞 斜交いの風

・後出しのじゃんけんぼんが得意技

・間引き菜へ思い重ねる運・不運

・斜交いの風に足元揺れている

心象風景を詠んでおり、ポエムを感じる雰囲気

のいい作品である。シックな題を付けた感性を買いたい。作品の仕上げに甘い部分がなくもないが、今後の伸び代に期待したい。

入選 かずみ草

・秘めやかな慕情が匂う指の先

・かずみ草君の隣で満ちていく

一連のしなやかな作風に感性ある女性作家を

思う。やや情念に流されたきらいがあり、またタイトルの付け方にも一工夫欲しい。

入選 生かされて

・平凡を重ね非凡な明日となる

・許さない石を心にひとつ持つ

全体に地味な作風であるが、ひたすらに自らの生き方を問う作品群は迫ってくるものがある。

ただ教訓句にならぬように留意したい。

入選 婦唱夫隨

・主導権握ると歩幅狂いだす

・婦唱夫隨もう違和感も慣れました

夫婦間の情景をパロディー風に詠んでおり、

意表を突いた題名のもじりが作品全体を浮き彫りにしている。息抜きの句も若干入れたい。

入選 大団円

・花でいる疲れ時々立ち止まる

・大団円鬼も佛も良く笑い

視点が八方に及んでおり人生に長けた作者を思う。固い感じがするが作者の個性だろう。

秋田県川柳懇話会会長

川柳鈴の笛吟社主幹

## エッセイ

### 選考を終えて



佐々木 義 幸

最優秀賞『すり鉢を悼む歌』は、今回の応募

作の中で群を抜いていた。簡潔だが落ち着きのある文体で、かけがえのない人やものに対する

惜別の思いが重層的に描かれ、読み味わうべき

佳品となっている。

奨励賞『クニマスサマ』は、クニマスを巡る

伝説や玉川流域開発の努力が、自らの成長の足跡とも重ねながら書き込まれており、単なる郷土紹介の域を超えた作品となった。

奨励賞『私にできること』は、人が年齢を重ねていくというこの意味を考えさせてくれる。

今は住む人のない家の手入れに夫と通う作者の

視線の深さが感じられる。

入選『まなざし』は、家族の絆を、想念の流れに従い描いた、「随想」という言い方の似合う作品である。改行、行空けの多いスタイルは

評価の分かれるところであろう。

惜しくも入選には至らなかったが心に残る作品についても触れておく。

『稗を取る』は、米作農家にとっては敵であるヒエがテーマだが、文章からは余裕すら感じさせる。この作品では、「テキもサルもの」といった表記に違和感がある。

『百花繚乱いとをかし』は、明るさと自然への

敏感さがこの作者の持ち味か。「春から夏にかけていろいろな色に……」の文は、もう少し

前の方に置く構成がよかったか。

『景色の流れの中で』は、金農球児の活躍を

『景色の流れの中で』は、金農球児の活躍を

きっかけとして湧き上がる作者の思いが伝わる。市川海老蔵の言葉は、構成上、重要ではあるが、寄りかかり過ぎであろう。

全体的なことでは、経験や人との出会いを書き残したいという強い願いの窺える作品が多かった。いうまでもなく、一人一人の人生は貴重であり、その経験や肉親との強い心のつながりなどの一つ一つは、かけがえのないものである。残念なのは、そうした貴重な内容が含まれていても、読み手の心が動くような仕上がりになっていない作品も多かったことである。

できごとを時間に沿って記述してあるが、最も大事なことは何か、それについて自分自身はどのような思いで振り返っているのか、といったことが不明な作品もあった。あるいは書き進めていくうちに溢れる思いを制御しきれなくなっただけか、文章全体の構成がよくわからなくなっているものもあった。

故郷への愛情がテーマの作品も数点あり、郷土の誇るべきものを調査・紹介しようという意欲が感じられた。しかし、資料を丁寧に書き写してあっても、作者自身が何を感じ、何を考えたかがよく表現されていないければ、読み手の心を動かす力が不足する。

こうした意味での完成度が不足してしまった要因と対応を、三点挙げてみる。

ひとつには、内容の盛り込みすぎである。言いたいことをすべて書き込みたいという思いが強いためであろう。しかし、指定された字数との兼ね合いもある。書き始める前に、中心的な事柄や思索をはっきり絞り込みたい。

ふたつには、構成意識の弱さである。内容、分量、順序といった全体の配置をおよそ決めて、書き始めた。これは、段落を意識することでもあり、無意味な改行や行空け、無段落から生じる読みにくさの解消にも通じる。

みつには、推敲不足である。書き上げた後、時間をおいてから読み返すと、自分の文章が客観的に読める。誤字・脱字等の発見はもちろん、より適切でわかりやすい表現を探す作業を通じて文章が練り上げられていく。このため辞書は必ず用意しておきたい。

文章表現を料理になぞらえるならば、いかに高級な食材をそろえても調理や盛りつけが下手ではおいしくないのに似ている。材料の選び方や組み合わせ方、さばき方や味のつけ方といったところは、料理人すなわち作者の腕の見せどころであろう。

## 選評を終えて



羽田朝子

今年度はエッセイ部門に合計二十三篇の作品が寄せられ、そのなかから最優秀賞一篇、奨励賞二篇、入選一篇を選出しました。

私が審査の基準としたのは、以下の三点です。第一に、明確なテーマが打ち出されており、なおかつ第三者が読んで理解できる確かな文章であるか。第二に、テーマを効果的に表現しえる構成であるか。第三に、独自の視点や思索が表現されており、それが読者を惹きつける魅力があるか、ということです。

最優秀賞の「すり鉢を悼む歌」は、この三つの要素を兼ねそろえた作品でした。この作品では、一家に戦前から残るすり鉢をめぐる、作者の祖父母や親世代が遭遇した戦争体験が語られています。東京大空襲により焼け出された一家が無我夢中で秋田へ辿りつくなか、唯一焼け残ったすり鉢を背負って持ち帰る祖母の姿が印象的に描写されています。ここには、戦争に翻弄されながらも、それを乗り越え生き抜こうと

する逞しさや生命力が鮮烈に描きだされています。またすり鉢への固執の裏にある祖母の心情に思いを巡らしており、作者がすり鉢を「悼む」心情が説得力のある形で表現されています。練られた文章で構成も優れており、読者を引きこむ魅力を持っています。

奨励賞の「クニマスサマ」は、近年その生息が明らかに注目された田沢湖のクニマスをめぐって、多方面からの思索を展開したものです。冒頭では田沢湖の辰子伝説が、続いて田沢湖のクニマスを絶滅させた環境破壊と近代発展の歴史が語られます。それに交錯する形で、作者自身の体験や心情——祖母が語る辰子伝説の思い出、自らが目にした戦後から現在に至るまでの仙北平野の農地開発、その犠牲となったクニマスへの追悼の念が印象的に描かれています。

同じく奨励賞の「私にできること」は、嫁の立場にある作者の舅への思いを、一定の距離を保ちながら淡々と描いています。同時に母親を早くに失った夫への愛情にも焦点が当てられています。ただし、舅の老後をめぐる戸惑いや迷い、罪悪感に言及しているものの、それへの思索が深められることなく夫への愛情にスライド

して終わっており、この点で消化不良の印象を受けました。

入選の「まなざし」は、亡くなった父親の思い出を娘の視点から語っており、大切な存在を失った悲しみや喪失感、そこからの再生が描かれています。父の雑記帳を通じて、生前には思い至らなかった父親の娘や妻への愛情を知る場面には心を掴まれました。ただし、結びの部分で情景描写に力が入るあまり、同時に描かれている心理描写は表現が曖昧でよく事情がつかめない部分がありました。

今回の選考からは外れてしまいましたが、印象深い作品だった「百花繚乱いとおかし」を取り上げたいと思います。

この作品では、関東圏から秋田にやってきた作者が、秋田の冬の色の無い世界に落胆するものの、春に一斉に花木が咲き乱れるさまに魅了された経験を描いています。そして季節ごとの秋田の色とりどりの美しい風景を次々に列挙しており、その華やかさが目を引きました。ただし風景の列記に終始しており、全体的な構想としては盛り上がり方に欠け、まとまりのない印象であったのが残念でした。

そのほか応募作品の中には、自らの経験を漫

然と思いつくままに並べ連ねるものが多々ありました。まずは自らの経験や思索を客観的に捉え、伝えたいことを整理することが必要だと思います。また今回は他の著作の一部を引用する作品も目立ちました。もちろん引用によって作品世界が広がり、相乗効果を生むこともありますが、あまりに引用の比重が大きいと、作品の独創性が失われてしまいます。引用の際には作品の独創性とのバランスに配慮することが大切ですよ。



## 選を終えて

野 口 千恵子

今年は二十三篇を読ませてもらった。

全体を通じて、懐古的なテーマが多いのは応募者の年齢からくるのは仕方がない。書きたいという強い想いのあまり、書き出しから最後まで、改行も段落もない作があったりして、読み手として考えさせられた。

一瞬息が止まるような作品には出会わなかったが、三人の審査員が協議して、入賞を決めた。



最優秀賞「すり鉢を悼む歌」作者は過年度入賞経験がある方のように、より一層の上達が見えて感心した。内容、構成、表現もよく、何となく、読み手に素直に入る感動的な話が魅力である。東京空襲での山場、また終りの方の由利地方の農婦の服装や方言を加えたことで一層の厚みが出た。題もなかなかよかった。

奨励賞「クニマスサマ」

幼いころの祖母の寝物語から筆をおこし、変貌していく古里や、クニマス再発見のいきさつを、丁寧に、適切な描写で綴る作品は、読み易く整っている。クニマスに心を寄せる作者の心情が伝わって共感を呼ぶ一作である。

奨励賞「私にできること」

舅との係わりを淡々と描いた作品。これという特別な山もないけれど、読み終った時の清潔な感動は何からくるのだろう。全体を流れる作者のやさしさ、思いやりが溢れている。

淡々と文は進むが、折々に見せる舅の姿が浮いてくる。早く母を失った父と息子。嫁としてその家の台所で、ほこりを被った鍋を見て、亡き姑の記憶をたどる場面など秀逸である。

入選「まなざし」

雰囲気のある一作である。病がちの三人家族

が寄り添って生きる暖かな日々、個性的な描写が生きてくる。父の手帳に書かれた娘への思いに感動する筆者。後半の草生津川の描写は美しいが、少々重い。しかし感性は美事。

賞には入らなかったが、印象深い作品をあげてみる。「稗を取る」現実的で適切な描写が優れている。一点をしっかりと見て、農業を知らない人々にも知らしめる所が多い。整った作品で選外になったのは残念だった。

「百花繚乱いとをかし」北国の春をよるこぶ筆者の驚きと楽しさ、素直な明るい文章は、若々しい。ただ一個所山場がほしかった。「ごん狐」力作だったが、記述が重複して読み手が迷う。構成面でもう一考の余地あり。引用文が多いからなのだろうか。組み直したら素適になると思った。「守り伝える風土愛」数々の秋田民謡から郷土の食生活まで、古里への愛が満ちた作品。原稿用紙の使い方や段落などを学んでほしい。「老人クラブ一年生」正確な文言と、素直でいきいきした文章が心地よい。平凡な話の中にかドラマがあればなあと残念だった。

「和風翁を偲ぶ」金浦町の安藤和風の句碑から筆を起こし和風の業績、人となりを調べて一作品としている。一人の人物を深く一筋にまとめ

た意義は大きい。「現代の吟遊詞人を目指して」インドから届いた作品なのだろうか？日本人学校の教師として、筆者は活躍している方のように。自作の詞はそれぞれだが、全体から作者の心意気を感じられる。グローバルな異色作であった。

今年度の応募作全体を通して感じたのは、それぞれがテーマに添って真摯な筆で、作品を仕上げる努力をしているのに感心するが、文章を綴る作法が分からない人がいて、読みづらい原稿が何編もあった。基本的な書き方を学んでほしい。

# あきた県民文化芸術祭2018「あきたの文芸」応募状況

## 1 部門別（応募作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
30年度	12	36	51	98	47	23	267
29年度	13	52	67	88	55	33	308
28年度	9	32	72	84	57	24	278
27年度	12	32	56	85	44	31	260
26年度	15	37	71	84	50	21	278

## 2 男女別

	小説・評論		詩		短歌		俳句		川柳		エッセイ		総数	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
30年度	7	5	14	22	23	28	57	41	27	20	9	14	137	130
29年度	7	6	15	37	31	36	50	38	37	18	15	18	155	153
28年度	6	3	11	21	35	37	54	30	38	19	12	12	156	122
27年度	5	7	14	18	26	30	46	39	28	16	15	16	134	126
26年度	9	6	15	22	34	37	53	31	32	18	10	11	153	125

## 3 年代別

	総数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	不明
30年度	267	10	4	7	8	21	49	91	74	3	0
29年度	308	20	6	7	10	28	52	105	75	5	0
28年度	278	6	7	8	6	11	59	98	72	10	1
27年度	260	13	3	8	7	12	61	96	57	3	0
26年度	278	8	4	8	8	17	62	109	58	4	0

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代
小説・評論	2	0	1	1	2	3	3	0	0
詩	5	3	2	3	5	7	8	3	0
短歌	0	1	1	1	2	8	15	20	3
俳句	3	0	2	2	5	15	37	34	0
川柳	0	0	1	1	4	10	17	14	0
エッセイ	0	0	0	0	3	6	11	3	0

## 4 応募の経験（作品数）

	小説・評論	詩	短歌	俳句	川柳	エッセイ	総数
再	4	30	38	73	40	16	201
新	8	6	13	25	7	7	66
計	12	36	51	98	47	23	267

再…以前にも応募したことがある方

新…今回初めて応募された方

## 5 月別応募数

6月	7月	8月	計
32	43	192	267

# あきたの文芸 昨年度の入賞者と作品名（入選・グリーン賞を除く）

第五十集（平成二十九年） 応募 三百八作品

・小説・評論部門  
・詩部門

奨励賞 藤原 涼「誰そ彼・明か時」  
最優秀賞 堀内 和 佐「記憶」  
奨励賞 渡辺 正 子「物言わぬ花」  
奨励賞 浅倉 紀 男「ふりしきる ゆきが」  
奨励賞 加藤 舞 雪「八月が遺した」

・短歌部門

最優秀賞 大山 文 穂「濁流」  
奨励賞 五十嵐 勝 子「花梨酒」  
奨励賞 小林 鏡 悦「晩年 それぞれ」  
奨励賞 佐々木 ヨリ子「家守るかたち」  
最優秀賞 佐々木 豊「冬の海」

・俳句部門

奨励賞 和田 仁「縄文賦」  
奨励賞 種村 聖巴子「太平洋戦争」  
奨励賞 工藤 五十六「花火」  
奨励賞 小畑 寒 丈「たんぼ讃歌」  
奨励賞 石井 トモ子「がっこちゃこ」

・川柳部門

奨励賞 佐藤 啓 子「やさしい距離」  
最優秀賞 横山 章 子「おじゃれこ」  
奨励賞 佐藤 清 助「音楽の力」  
奨励賞 坂本 愛 子「湯治の道」

・エッセイ部門

奨励賞 春野 昌 和「観音様を描く少女」

## 編集後記

◎平成30年度あきた県民文化芸術祭2018  
「あきたの文芸」入賞作品集『あきたの文芸  
第五十一集』を刊行しました。

この作品集は、十五歳から九十三歳までの応募作品二百六十七編より、最優秀賞四編、奨励賞十四編、入選二十八編、二十五歳以下の文芸活動を応援するグリーン賞四編、計五十編を掲載しております。

◎この事業は、あきた県民文化芸術祭2018の一環として実施しております。応募いただいた皆様をはじめ、文芸団体や広報協力をしてくださった各市町村、報道機関、図書館などの文化施設、さらには、事前審査から選考・校正まで多大なる御協力をいただいた選考委員の皆様には深く感謝申し上げます。

◎「あきたの文芸」は、今後もより読みやすく親しみやすい郷土を代表する文芸誌として、一層充実させていきたいと思っております。

## あきたの文芸第五十一集

あきた県民文化芸術祭2018

「あきたの文芸」入賞作品集

平成三十年十一月十二日

発行・編集

秋田県

(観光文化スポーツ部文化振興課

電話〇一八―八六〇―一五三〇)

共催 一般社団法人秋田県芸術文化協会

秋田県教育委員会

表紙デザイン・挿絵 山本 文志

印刷・製本 株式会社 三戸印刷所